

[資料紹介] 横系・縦系・レギュレーション : 社会科学の道具

著者	A リピエッツ, 若森 章孝
雑誌名	関西大学経済論集
巻	52
号	2
ページ	289-326
発行年	2002-09-15
その他のタイトル	A.Lipietz, La trame, la chaine, et la regulation : un outil pour les sciences sociales
URL	http://hdl.handle.net/10112/4520

資料紹介

横糸・縦糸・レギュレーション——社会科学の道具*

A・リピエッツ**

若森章孝 訳

フランスでは流行がくるくる変わっている。スカート丈が短くなったりロングになったり、ズボンの裾が象の鼻のようにラップ型になったと思えばくるぶしのところできゅっと締まるようになったり、と。社会科学もそうだ。ミニスカートやラップズボンが流行した1960年代末には、構造主義が勢力をふるっていた。行為者の行動や予測は、社会構造の再生産という要求を反映するものにすぎなかった。1980年代になると、服飾はむしろ簡素なもののがやり、社会科学の方法論は個人主義的になった（ついでに言えば、このことはモードの体系の相対的自律性を証明している）。方法論的个人主義は、構造は「合理的な」行為者の企てと実践から合成される結果にすぎない、という考えを押しつけるようになった。

構造主義の知的影響力は1970年代の半ばに崩壊したとはいえ、「方法論的个人主義の支配的潮流」が確立されたわけではなかった。それは古くからのケインズ的・デュルケーム的伝統のなごりなのだろうか？ フランスの知識人には、「新しい経済学者」とか「新しい社会学者」等によってアングロサクソン諸国から輸入された、直ちに使用可能なモデルに身も心も投じてしまう、ということがなかった。むしろ、フランスの知識人はモデルの輸入に減退気味だった。個人主義的なざわめきに支配されてはいたとはいえ、フランスでは依然として、構造主義の行き過ぎと直ちに距離をおいて、個人や社会の諸集団の逸脱可能性が表現する不安定性と変化の誘因を、「構造なき主体」の世界に陥ることなく「主体なき構造」の世界に再び導入しようとしていた異端の潮流が根強かった、と私には思われる。「蓄積体制」と「調整様式」の観点からの経済的アプローチは、こういった関心事から生まれたのである。

このような経済的アプローチによる研究の成果として、とりわけフォーディズムとその危機に関する分析がよく知られている。私はここで、レギュレーション・アプローチがフランス

*この論文は、A. Lipietz, *La trame, la chaîne, et la régulation: un outil pour les sciences sociales*, CEPREMAP, no. 8816, 1988を邦訳したものである。

**数理経済計画予測研究所および国立科学研究所教授

で生まれた知的背景を知る者として、「構造主義 対 個人主義」の不毛な対立の止揚という、根底にある知的探求に立ち戻りたいと思う。このような探求は、それゆえ意図的に主観的なものになるだろう。それはいわば私の知的歩みの内省であって、レギュレーション・アプローチの形成に貢献した多数の研究者をこの内省にいざなうことは難しいだろう。

知的歩みの内省というものは研究者の経験ばかりか教育活動にも基づいているだけに、それだけいつそう主観的になるだろう。レギュレーションに関する短編映画のシナリオ作りの予備作業（Lipietz [1987a]）をしていたとき、映画監督は、考える際にいつも紙に書き殴っているイメージ、あるいは説明する際に板書しているイメージをまず自分の前で再現してほしい、と私に頼んだ。彼の経験によれば、どんなに教科書的な説明よりもそのようにした方が考え方の根本がよく分かるのだそうだ。このとき私は、数理経済計画予測センターの共同研究（CEPREMAP [1977]）においてたまたま使っていた、織物や横糸、縦糸、綜統〔織物製造の際、横糸を通す杼道を作るために縦糸を上げさせる道具〕（ときに橋脚のあいだの水の流れというメタファーで代替される）といったメタファーの理論的重要性——それが重要であることは無意識ながら感じていた——を納得したのであった。私は、こういったメタファーが、すでに「空間の競争的生産と独占的生産」に関する以前の考察（Lipietz [1975]）の中にも潜んでいたことに気がついた。「蓄積体制と過程する価値」の関係を取り扱う際に用いていたやり方は、実を言えば、アダム・スミスの「見えざる手」に関する議論とそれほど違わなかった。ヘーエルストランド（Hagerstrand [1970]）のような地理学者達も依拠していた「見えざる手」は、ピエール・ブルデューやアンソニー・ギデンズのような社会学者が「構造と行為者」のジレンマを独力で断ち切ろうとしていたやり方と緊密な関係をもっていた。実際、「見えざる手」によって、私はずっと以前に出会った、「対象的主体」としての人間の実在（Kosik [1968]）の本質に関する考察（Lipietz et Rouilleault [1972] , Lipietz [1973]）に立ち返ることになった。それは、当然のことながらカール・マルクスを経てスピノザ（能産的自然と所産的自然）まで、さらにはヘラクレイトスまでにも遡る弁証法的アプローチであった。

以下この論文では、思いのままきわめて主観的に、つまり大がかりな批判装置を用いずに、こういったメタファーの豊かさについて語りたい。多くの研究者は彼ら自身の内的な知的図式をメタファーの中に見出すだろうし、私を取り上げるさまざまな著者に自分達もの関わっていることを容易に認めるだろう。

まず、レギュレーション・アプローチが発展してきたその知的文脈をざっと説明し、次に、「横糸・縦糸」という表現について「理論的に掘り下げて」論じよう。それから、経済学および地理学の二つの応用例を述べることにする。

1. 好機に恵まれたレギュラシオン

ミシェル・アグリエッタは1975年から76年に、数理経済計画予測センターの共同研究(CEPREMAP [1977])を動機づけることになる長期セミナーの中で、自分の学位論文(Aglietta [1974])をめぐる議論を組織化した。当時の状況について、フランスの社会科学研究の限られているとはいえ重要な分野では、ルイ・アルチュセール学派に率いられた構造主義的マルクス主義が息切れしながらも依然として支配的であった、と特徴づけることができる。ところで、構造主義的マルクス主義の基本的命題は、次のように要約できる¹⁾。

A. 社会的現実²⁾は織物であり、相互に重層的に決定された(ある関係が他の関係より根本的だとしても)、相対的に自律的で独自の諸関係の接合である。つまり社会的現実は、「つねに所与の、重層的に決定されるとはいえある社会関係が支配的な影響をあたえる全体」である。

B. これらの社会諸関係のそれぞれはその「担い手」の行動によって結果として再生産される(「構造は結果として存在する」)が、社会諸関係の担い手はその主体性と無関係に構造を再生産する条件の中に置かれている。

アルチュセール学派はこれらの基本的な方法論的命題に、経済学者にとって重要な次の二つの命題を、多かれ少なかれ偶然的あるいは派生的なやり方でつけ加えた。

C. 「生産諸力」自体が生産の社会諸関係の物質化である(E・バリバルとC・ベトレームによって展開された命題)。

D. 交換関係の矛盾的性格は表面的で二次的である(アルチュセールによって強く主張され、バリバルによって展開された命題)。

命題Aの豊かさについては、ここで詳しく議論しない。フランスのマルクス主義的な考え方は、命題Aの豊かさのおかげで、^{ラ・ボリテック}政治やイデオロギーやモードは根本的な経済構造を「反映」するにすぎないという「全体性の表出」の幻想から免れることができたのである。例えば、ドイツの「資本の論理」派のアプローチの根底にある普遍化された機能主義は、扇動的革命集団のアクセサリーとして遠ざけられたのであった。

命題Cはイタリアの「労働者主義派」やアングロサクソンの「ラディカル派」や中国の「急進派」の命題につながるが、この命題の豊かさについてもここでは議論しない。(1859年の『経済学批判』の「序文」の史的唯物論の公式の中にも、生産力決定論的な考えがあるとはいえ)マルクス自身よりも19世紀のブルジョワ的イデオロギーに負っているスターリン的

な技術決定論と縁を切った命題Cは、テイラー主義的労働編成やその危機、その止揚に関するわれわれのあらゆる研究の基底にある。

その反対に、命題Bと結局は命題Bの帰結であり例証である命題Dは、アルチュセール主義の「悪しき側面」を構成するが、アルチュセール主義は、この側面を通じて当時の構造主義の知的支配に関与していた。レヴィ=ストロース〔1908～ 人類学者、構造主義の創唱者〕からJ・ラカン〔1901～1981 精神分析家〕に至る構造主義は、あらゆる分野で「主体」を追跡していたのだった。ところで、例えば「^{キャプテン・オブ・インダストリー}産業の将帥」の個性性や主体性の最初の例証（おそらくその経済的決定因）は、商品関係の存在や、「相互に独立しておこなわれ」その社会的有用性が事後的に探し求められる「私的諸労働」（『資本論』の第一章！）の自律性の中に見出される。アルチュセールは、『資本論』の第一章を読者の目から遠ざけることで、主体や矛盾や商品関係を検閲によって一気にカットしたのであった。E・バリバルはこの考え方を発展させて、危機の根底にある構造的矛盾の存在を否定するに至ったのである。つまり、構造はその存在を維持すべき資格を有している、というのである。

だからといって「すべてはそのためにおこなわれる」と考えるなら、機能主義に限りなく接近してしまうことになる。E・テレー（Terry [1977]）は、まさしくこのことを次のように説明した。「再生産に関する考察に乗じて機能主義的解釈のあらゆる時代遅れの用具が繰り返し登場していることを、われわれはしばしば目の当たりにしてきた。つまり再生産は、分析される制度や構造の総体がそこから生じる究極原因として考えられている……。このような誤りに陥らないためには、再生産が目的ではありえず、主体のみが目的を提起することができる、ということをもまず思い起こさねばならない。ところで、社会は主体ではない。再生産されるものは間違いなく何よりも矛盾である、ということを取りわけ想起すべきである……。それゆえ、再生産の観点に立つことは結局のところ、生産と分配の循環そのものがこのような矛盾の両極——支配者と被支配者、搾取する者と搾取される者という基本的生産関係——を絶えずどのように対質させるか、ということを理解することである。また、こういった矛盾が乗り越えられたり解決されたりする諸危機に対し、支配し搾取する者はどのような予防策をとろうとしているのか、逆に支配され搾取される者はどのように、矛盾をなくしたりそこから脱出したりすることに多少とも意識的に執着するのか、ということを理解することである。再生産を全体的に見るならば、それは矛盾の両極が対決する闘技場であると同時にその帰結でもあるのだ」。

思い返せば、危機のない——「流通における」危機のない——長期にわたるフォード主義的成長がいかに機能主義的幻想に大きな影響をあたえたかが分かる。「流通主義」は、マルクス主義者達のあいだでおこなわれてきた論争では（とりわけローザ・ルクセンブルクに対

する批判において、また、「中心一周辺」関係の分析においても) あざけりの対象であった。それゆえ、生産、つまり資本／労働関係にとどまざるをえなかったのだ。

ミシェル・アグリエッタの学位論文 (Aglietta [1974]) は伝統的なやり方に従っていた。自立的な諸資本の存在が出現するまでに何百頁にもわたる資本／労働関係の分析を待たねばならなかった²⁾ が、幸運にも、資本／労働関係の分析の重点は労働編成の様式と付加価値の分配関係 (偏向と所有!) に偏向していた。しかし、分析の重点が偏向していたために、この複合的関係の再生産の中に矛盾——したがって危機の可能性——を出現させ、それゆえレギュラシオンの問題を提起することができたのだ。まさしく機は熟していた。フォーディズムの危機は始まったところだった。

実を言えば、「レギュラシオン」という用語を導入しても、「再生産」という用語が内包する機能主義的あいまいさを一掃するにはまったく不十分であった。ミシェル・アグリエッタの最初の定式化では、また、数理経済計画予測センターの研究から生まれたいくつかの刊行物 (CEPREMAP [1977]) では、「レギュラシオン」はただ、「矛盾的性格を有する社会関係の再生産がそれでも進行するのに必要なもの」を指し示していたにすぎなかった。確かにそうであった。われわれは、以前に危機に陥っていないものとしてのフォーディズムについて説明することで、危機について説明しようとしていたのだ。このように「調整様式」は結果の形態で広く普及したのであり、「それでも」とか矛盾や危機への傾向 (調整様式の不安定な結果として危機が抑制される) といった、先決問題に関する議論から広がっていったわけではなかった。つまり厳密には、「事後的機能主義」が語られていたと言えるのである³⁾。

この立場はすでにとられていたと言わねばならない。〔レギュラシオン〕には、次のような、かの有名な G・カンギレームの定義が重々しく詰め込まれていた。「レギュラシオンとは、運動と行為の、またその結果や産物の複数性——これらはその多様性や連続性の故にさしあたり相互に外的なものである——を、何らかの規則や規準に従って調節することである」(Canguilhem [1985])。

「最初は相互に無関係になっている運動や行為を何らかの規則や規範に従って調節する」といったレギュラシオンの定義は、二つの偏向によって取り返しがつかないほど損なわれていた。第一に、「運動」や「行為」が (その対立や分岐において) 単一的関係の矛盾自体によって導き出されたものとして考えられていなかったのだ。第二に、この定義は、目的論的規範の存在や自動的に機能主義を導く目的原因主義の存在を想定していたので、調節の「目的」は、神または人間の設計者にその組み立てを託すことが可能な調節装置が存在する理由として現れた。システム理論やサイバネティックスは、もはやそのフィードバック機能を取りつけさえすればよかったのである。

1970年代にアトランやP・トム〔プレグナンツ論で著名な数学者〕、プリゴジン〔ゆらぎを通じた自生的秩序形成という考えを提唱した物理化学者〕、アタリ⁴⁾に率いられて出現した「レギュレーション学派の波」は、このサイバネティックスの解釈においても、構造主義に比べてきわめて進んでいた。フォーディズム時代を通じて明確なものとなったアイデンティティや表象の総体(こんにち私が「ヘゲモニーを有するソシエタル・パラダイムと呼んでいるもの(Lipietz〔1986〕))がじょじょに衰えていく一方で、社会システムを再生させることができるように見える新しい社会運動が出現する。あまりにも静態的すぎて新たな均衡をもたらすことができないようなシステムを変容させる、集合的行為者のこのような能力を、アラン・トゥレーヌ(Touraine〔1978〕)は積極的に、レジス・ドゥブレ(Debray〔1978〕)は消極的に理論化した。「行為者の自律性」は、ジャン・ピエール・デュプユイ(Dupuy〔1977〕)にとっては社会の「構造的安定性」の条件になる。行為者の自律性を強調することは実り豊かな考え方であるとはいえ、過去から引き継がれた重みある構造の硬直性や、イノベーションを安定させるために制度的妥協を作り上げる必要性を事実上無視することになってしまう。1974年から1988年までの右派ならびに左派の歴代政府にとって、新たな発展モデルを調整できるそのような妥協を提起するのが困難だったことは、社会においては自由主義的イデオロギーの勝利を許し、少なくとも社会科学の領域において方法論的個人主義や「ミクロ社会学」の前進を助長させることになる⁵⁾。

すでに述べたように、このような「前進」は全面的勝利からほど遠かった。まさにこの時期に、アナール派の歴史研究、とりわけジョルジュ・デュビーやフェルナン・ブローデルの研究が一般大衆の中で認められたのであった。ところでこういった研究が注目したのは、重みある構造の永続性や、日常生活に重くのしかかる規範^{ノルム}の影響力、個人や集団の創意にあたえられるごくわずかな自由の空間である。さらに社会学では、Collectif (Révoltes Logiques)〔1984〕が「社会学者の影響力」について語る事ができたほどに、ブルデュー派の著作は成功の一途をたどったのであった。

ブルデュー派の場合とはりわけ興味深い。ブルデュー派の理論を構成する命題はアルチュセールのものときわめて近い、というのが通説的な見方だ。すなわち、社会の現存の状態を身体化する「ハビトゥス」の機能である行為者の戦略は、現存する事物の状態を再生産するのに役立つにすぎない、と考えられている。パロディー化して言えば、この父にしてこの息子あり、この希望やこの願望にしてこの結果あり、ということになる。とはいえ、いかなる相対的「権力」を戦略や構造にあてるのか、ということを知ることだけが問題のすべてなのだ！ 注意すべきことは、P・ブルデューが二つの側面から徹底的に批判されたことである。彼はもちろん構造主義者として批判されたが、そればかりでなく、方法論的個人主義

者として批判された。すなわち、C・レヴィ=ストロースはブルデューを「自然発生主義者」として批判したのであった⁶⁾！ 実際、ハビトゥスや戦略の概念を深めること自体が、ブルデュー派をレギュラシオン派と同じ問題—— G・デュビーのようなアナール派の一部の歴史家と同じ問題——の探求に向かわせた⁷⁾。L・ボルトンスキー (Boltanski [1982]) の好著は、1930年から1950年にかけてじょじょに転換する社会構造の基礎上で、「中間幹部」の集団がどのように形成され、また、「勤労者社会」(Aglietta et Brender [1984]) —— 勤労者社会は、フォード主義的モデルのフランス的形態になるべきもので、中間幹部の集団はそれを作り上げるのに寄与した——の中でどのように中心的位置を占めるようになったのか、について描いている⁸⁾。

以上のように、レギュラシオンの概念についての私の理論的・教育的な考えは、多少とも抑制された理論的、思想的な相互交流が織りなす文化的背景の中で育まれたのである。

2. 弁証法と織物

「変化するものがどのように自分自身と一致するかを、人々は知らない。それは、弓や堅琴の場合のように、反対方向に張り合う力によって調和する」。ヘラクレイトスのこの有名な言葉は、われわれの文化が弁証法と呼んでいるものの出発点をなしている。また、弓のイメージは社会諸関係の矛盾的性格に関するあらゆる説明に使える格好の例証だと思われる。事実、具体的で分かりやすい例を最初に取り上げてから商品関係や賃労働関係の説明の方が簡単である。学生達が一般に経験している恋愛関係を例にとるのが近道だ。恋愛経験がない場合は、例えばモリエールの『ミザントロップ』を思い起こしてみよう。

どの恋愛(この物語の中のカップル)も、明らかに一つの社会関係である。それは二重の意味で、つまり第一に二者間の関係であるという意味で、第二に、特定のカップルが生まれる前に承認されている社会形態の「パターン」あるいはモデルに従って形成されるという意味で、恋愛は社会関係である。カップルになりたいという人間の欲求は確かに昔からあるが、このカップルを「愛」という形で表現するのはかなり最近になってからのことである(例えば、カップルを「愛」という形で表現することがフランスの中産階級のあいだで確立されたのは、17世紀になってからである)。諸個人はすでに主体(それは、社会諸関係の総体によって重層的に決定された状態である)として意識されていなければならないし、また、恋愛関係によって満たされるような欠落感を感じていなければならないだろう。諸個人はこういったことを実例や文化や経験によって学ぶ。恋愛関係を結ぶ柔軟な性向 *disponibilité* は、このように個人の属性として現れるけれども、それはただ、第一の意味で社会的な個人間の関係として、そして第二の意味で社会的な「パターン」に従ってしか実現

されないのである。

ブルデューのハビトゥスと類似したこの「柔軟な性向」^{ディスポニビリティ}の探求は、生物の社会生活を苦勞しながら解明してきた精神分析的解釈の目指すところでもある。われわれは、『フィガロの結婚』の中でロレンゾ・ダ・ポンテがシェリユバンの口を借りて述べているような、本質的なところにとどまろう。

「愛が何なのかご存じのあなた

私の心の中に愛があるかご覧なさい(……)

私は自分の外側に幸せを求めている

誰が幸せをもたらしてくれるのか分からない

その幸せが何なのかも分からない(……)

それでもこうして恋い焦がれることが私には嬉しい」

このように自分の外側に幸せを求めることは、カップルとして結ばれることや神秘主義思想、熱望、労働などを通じて多少とも満たされる。恋するカップルという社会的存在は、幸福を追求する個人的戦略の結果などではけっしてない。それは歴史的な発明だ、と言われている。だがそれぞれの個人にとって、カップルをつくり維持していくことは確かに(多かれ少なかれ協調的な)戦略の結果である。

愛について柔軟な性向を有する二人の出会いが提供するの、それゆえ愛の「素材」、すなわち、愛の生物学的土台(アルチュセールの言う「担い手」)だけである。しかし、まさに恋愛関係がこの二人を恋人同士にする。モリエールの恋人達が知り合う前のことについてはこれまでまったく知的関心の対象となっていないが、おそらくそれは間違っている。われわれはそこに戻ることしよう。

恋人にしても愛にしても、世界にそれだけで存在しているわけではない。愛の社会関係を分析する前に、それが他の社会諸関係によって重層的に決定されていること(アルチュセールの命題A)を想起せねばならない。異性愛の場合には、まず、いわゆる男性支配の関係あるいは「性差による支配」(Guillaumain [1978])の関係があるが、その土台は恋愛関係の土台と一致しているとはいえ、男性支配の関係は恋愛関係のたんなる反映でも錯覚でもありえない。それから一般的に、家父長的關係の総体(とりわけ、恋人達を彼らの両親に結びつける関係)がある。また当然のことながら、諸個人の経済的独立性を規定する市場に基づく生産・分配の社会関係がある。さらに、「発言、退出、忠誠」というハーシュマン流の選択を上から重々しく決定する法的関係も存在する。

ところで、恋愛関係とは何だろう? それは、各人が自分の幸せや自己実現を他者に求める関係である。無償であたえ、一体化し、融合し合うといったさまざまな要素からなるもの

であるとはいえ、恋愛関係には、パートナーの両当事者が自律していることが前提され含まれている。すなわち、恋愛関係は恋人達を結びつけたり対立させたりする。というのも、二人の「融合」は各人の自己「実現」の手段であると同時に目的であるからだ。恋愛関係は、あらゆる社会関係と同様に矛盾なのだ。まさに商品関係と同じである。教会や善意の性科学者が、「自分が自分自身であると感じるのは、自分自身を自らに捧げることによってである」と説教することはできる。それはちょうど、自由主義的経済学者が私的利益の追求は集合的利益をもたらす、と繰り返しているのと同じだ。それはときに本当であるが、いつもそうであるとは限らない。それが本当であるとき、われわれは「^{レジュー}体制の中に」いるのであり、そうでないとき、われわれは「危機の中に」いるのである。

弓のイメージに戻ろう。矛盾とは二つの極をつなげたり対立させたりしながら規定する関係である、と定義することができる。

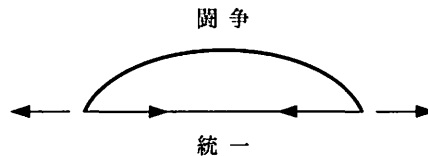


図0 矛盾を表現する弓

われわれが関心を寄せる矛盾（社会諸関係、その一つである恋愛関係）の中では、人間社会に（重層的に決定されて）存在するいかなる社会関係（カップルにせよ国民にせよ）も、独自の場所 place のシステム——階層化されているシステム（資本家 / 賃労働者）もあれば階層化されていないシステム（恋人とか交換当事者）もある——をこの社会において形成する。このような場所は、場所を規定する関係と相補的である。つまり、この観点から見れば関係は構造なのである。だがこの場所は、自分達にとって利益がある（とりわけ同じ関係における別の場所と比べて、あるいは別の関係における別の場所と比べて、あるいは物質的欲求と比べて）と多少とも感じられるような役割を、その場所にいる諸個人に付与する。関係の中にいる諸個人は、「ゲームを拒絶しよう」と「ゲームの改善」を試みながら「その場所にとどまろう」と、必然的に対立状態にある。要するにゲームに消極的になるか積極的になるかなのだ！ 贈与（商品関係における顕示的消費、恋愛関係によく見られる献身的行為）でさえ対立を含んでいるのである。

われわれは、役割を果たしながらゲームを改善していこうとする能力を「柔軟な性向」と呼び、この性向をブルデューのハビトゥスと同じものとみなした。そこから、次の二つのことが一つに帰着する。一方では、ゲームを続けていけば、つまり時間を通じて関係を体験していけば関係の解体に行き着いてしまっ、社会関係（たとえつかの間の相互関係であって

も)について語りにくくなる。他方では、ゲームの続行は関係の再生産に帰着するが、まさにこの統一性の再生産によって関係が識別できるようになる。それゆえ、時間が経過する中で関係が再生産されていくことを、矛盾の観点と場所の観点から次のように表現することができる。

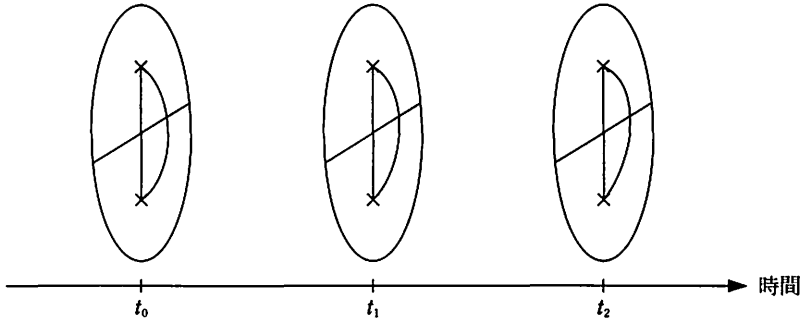


図1 時間における構造

関係によって規定された二つの「枠」には、時間が経ってもセリメニューとアルセストがこれらの場所にまた見出される。しかし、場所を占める諸個人の観点から見れば、事態はこれとは違うように現れる。彼らは自分達の愛の物語のアクターであり、それを通じて関係や場所が再生産される役割を担っている。二人の関係が再生産されるように(必ずしも関係が再生産されるためというのではない)この役割を彼らに担わせるものは、もちろん彼らの性向 disposition (彼らのハビトゥス)である。さらにまた、二人が他者の意図に対してもつ知覚や、場合によっては、身体化された規範(マリヴォーの『愛と偶然の戯れ』のように、男女が粋で気取った会話をすること)とか明示的な制度(結婚)として体験される外的な社会的圧力も、二人にこの役割を担わせる。それゆえ、次の点を考慮せねばならない。

1. 性向、ハビトゥス、利害、個人的欲望。
2. 行為者によって解釈される、場合によっては制度や装置によって調節される、関係を表象する空間。

関係を平等なものとして捉えるのか階層化されたものとして捉えるのか、つまり、当事者間の合意に基づくものとするのか抑圧的なものとするのかということは、いまの段階では重要でない。また、現実の力関係か仮定された力関係のどちらが表象空間の中で考慮されているのかということも、ここでは重要でない。いずれにせよ、関係が再生産されるには、好むと好まざるにかかわらず、永続の正統性に関する何らかの「合意」が必要だ。A・グラムシが明らかにしたように、搾取関係にさえ被支配者の同意が含まれているのである。「強制の鎧をつけたヘゲモニー」というわけだ。方法論的個人主義のきわめて大きな逸脱は、あらゆる関係を、共通する規範の承認という諸個人間の合意に還元してしまうことである。こ

のようなことが現実に存在するのは確かであるけれども、すべての関係を、法的に平等な者のあいだの合意、例えば都市国家における市民のあいだとか市場で交換し合う人々のあいだで交わされる合意に還元してしまうことは、幻想である⁹⁾。

ツキディデス〔古代ギリシアの歴史家でペロポネソス戦争を記録した『歴史』の著者〕によれば、アテネ人はペロポネソス戦争中、反スパルタに同盟に加わることを拒否していたミレトス市とは異なる見方に立って、自分達が中立であり続ける権利を正当化するために神の法律に頼っていたミレトス人に次のように答えたのだった。「法律は平等な者のあいだでしか有効でない。不平等な諸勢力のあいだにおいては、力こそが決定権をもつ」、と。このような正統化の原理がその場その場でしか機能しないことは、言うまでもない。安定した帝国では、ヘゲモニーがそれとは別の仕方でも確固としたものとして承認される必要があるのだが、それでも力は依然として正統化の背後に隠れている。恋愛関係の場合、力は原則として存在しないが、喪失という主観的代償が力関係としてそれぞれに（アルセストにもセリメーヌにも）影響を及ぼす。

いずれにせよ、図1はいまや異なる様相をとるようになる。「ハビトゥス」をもち、社会的関係性（カップルにしろ帝国にしろ）に組み込まれることから生じる表象をもつ行為者は、自分の軌道の総体が時間の経過の中で関係を構成し直すような戦略をそれぞれ展開させる。図2では、行為者のハビトゥスは小さな円で表され、その表象空間は小さな長方形の「カード」で表されている。

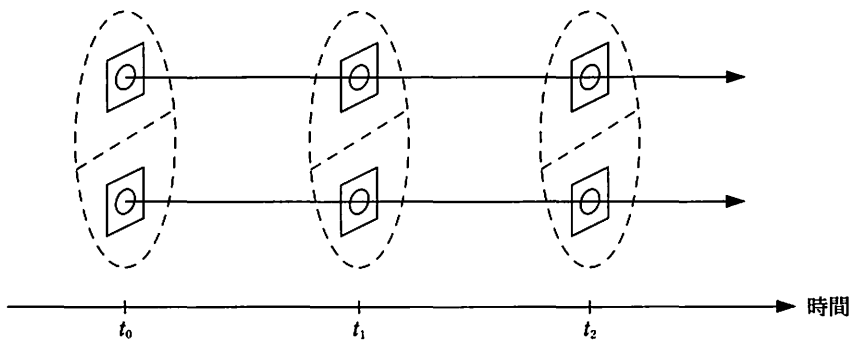


図2 軌道

図1と図2がいわば互に双対の関係にあることは一目瞭然である。次のどちらのように述べても、認識論的には「ほとんど」同じである。

- ・幕が進むにつれ、アルセストとセリメーヌを結びつける愛は、二人の性質や評判がそれぞれ異なるにもかかわらず、最終的な危機に陥るまで互いに愛し合う場に彼らを投げ入れる。
- ・アルセストとセリメーヌは、自分達の間を続けていく利害について絶えず細かく検討す

る、互いに惹かれ合う二つの主体である。対になった二人の物語に不幸な結末になる「一つの」愛の物語の様相をあたえているのは、ただ劇を観ている者だけなのだ。

それぞれのものの見方によって、構造主義的アプローチか個人主義的アプローチかが選択される。私の見方によれば、客観的つまり「現実的」であるということは、行動の比較的安定した有機的な相互連関が存在していることである。図1と図2のうちでどちらがより「現実的」であるとか、どちらか一方が他方に「一貫性」をあたえていると言う場合、その根拠になるのは「妥当性」しかない、と私は考える。妥当性とは言説の属性であって、現実の属性ではない。ここでようやく織物のメタファーを登場させることにしよう。

まず織工は、縦糸を設置することによって、図1に類似する水平的な場のシステムの素地を作る。次に杼〔横糸を通す操作に用いる機械の部品〕がこの場所のシステムを横断し、その軌跡のように横糸をかけていく。最後に、杼がその軌道の中で縦糸の場所のシステムに適合するように、綜統〔織物製造の際、横糸を通す杼道を作るために縦糸を上げさせる道具〕で調整する。外枠から外すとできあがる布に一貫性をあたえているのは何であろうか？ 縦糸がなければ横糸はもつれてしまうだろうし、横糸がなければ縦糸はだらりと垂れ下がってしまうだろう。

縦糸(図1)が形態をあたえ横糸が織物という実体の質料をあたえる、とアリストテレス流に言うことができるが、これは私の根本的な主張である。実証主義的な風潮は反対に(われわれはここでメタファーから離れることにする)、観察された現実だけが図2の軌道の総体であり、場所のシステムや構造(形態)は理論家の頭の中に存在するだけだ、と主張するだろう。逆に、社会的織物を理論的に再生産しようとする思考における具体的なもの(アルチュセールの用語による)¹⁰⁾の中では、アクター達が他者と一緒になって愛の物語や企業あるいは国家の物語等々を作り上げることを自ら想定していた、ということをおぼろげにはいかなない。アクター達のあらゆる戦略がそこから出てくるからだ。セリメーヌとアルセストは、固有の矛盾的性格を有する愛の物語にたまたま肉体をあたえる、実体のない存在にすぎないのである¹¹⁾。

そこで、その妥当性の基準について考えてみよう。人は物語を自分の思いどおりに語ることができるが、その物語はけっして現実にあるものではないだろう。だから、できるだけまく語ることが重要だ。個人主義は、その「実証主義」によって外見的には正統であるように見えるが、諸個人の有する「ハビトゥス」や「地図」が彼らの行為以前から存在する構造化された社会的総体性の産物である、ということをおぼろげに忘れてしまっている。まだ愛が芽生えていないときに、また、カップルが一族の長老によって再生産戦略の一環として結びつけられるときに、愛の物語に熱中する者など誰もいない¹²⁾。生産に関する容認しうる唯一の従属関

係が賃労働制度だけだというときに、自分を奴隷として売ろうとする者など誰もいない。他方、たとえサディズム的にでも自分に注意を向けてくれるのであれば、熱烈に愛されていなくても愛する人を追い求めることができる¹³⁾。マルグリット・デュラスのロワ・スタインは、語り手の窓の下で「恋」を楽しむことがなかった（恋を楽しんだのはタチアナ・カールだった）。同様に、賃労働制度の存在を知っているから雇用を求めることができるのであるが、それでも失業状態がつづくことはある。だから、現実の社会的織物の分析は、行為者によって認識された社会的諸形態の存在から出発しなければならない（たとえ理論がアクターの表象とは異なる表象を行為者にあたえらるゝとしても¹⁴⁾）。分析は社会的織物の形態を支える諸制度を解明し、要求される役割を担うことができるアクターの柔軟な性向を説明する必要があるのだ。

だが、アクターのゲームを彼らの役割に還元してしまうと、（構造主義的方向の中で）妥当性の限界を超えることになり、アクター達にはそれぞれ行動様式があるということが忘れられてしまう¹⁵⁾。換言すれば、「ハビトゥス」は、再生産の要請にありふれた仕方では適応することを個人に決心させるプログラムではないのである。ハビトゥスとは、自律的目標に合わせてゲームをおこなう柔軟な性向、あるいは、まだ可能性や利害が存在するときにゲームをやめる性向である。この意味では、ハビトゥスは現実をたんに再生産するだけではない。それは現実を変容させる、すなわち現実を生みだすものでもあるのだ¹⁶⁾。

このように行動や意図を構造の要請に還元してしまうのを拒否することは、周知のように、マルクスの「弁証法的」唯物論とフォイエルバッハの「形而上学的」唯物論（「形而上学的」とは、ここでは永遠不変の構造の実体を意味する）とを分岐するものである。「人間は環境と教育との所産であり、したがってその環境が変わり教育が変われば人間も変わる、という唯物論的学説は、環境そのものがまさに人間によって変えられるということ、そして教育者自身が教育されねばならないということ、を、忘れている。〔……〕環境の変化と人間的活動の変化との合致は、ただ変革的实践としてのみ捉えられ、合理的に理解されうる」（1845年に執筆された「フォイエルバッハに関する第三テーゼ」）。

ブルデューと構造主義を切断するこのような立場（Bourdieu [1987] p.24. 邦訳27頁）はずっと以前から存在するが、それはマルクスの全著作を通じてきわめて明確になったものである。『デモクリトスとエピクロスにおける自然哲学の差異』に関する学位論文以来、若きマルクスは、直線的落下を原子の「相対的な」現存在、つまり、空間の残りとの関係において「即自的に」決定される存在として考え、そして、その偏り *déclinaison* を原子の「対自的な」表現として考えている。「落下の運動は非自立性の運動である。〔……〕直線からの偏りは、その原子の胸の中であって、逆らって闘い抵抗することのできる何ものかである」¹⁷⁾。

総体性によって決定される傾向に対する偏差というこの考え方は、ルクレティウス〔エピクロスの原子観を継承して『物の本質について』を執筆した古代ローマの哲学詩人〕の言う「直線からの偏り」や「逸脱〔=偏向〕」—— Serves〔1977〕はそれが微分の論理と類似していることを証明した——と同じものである。私はそれを次のように図式化する。

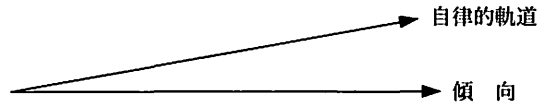


図3 傾向に対する自律的軌道

この考え方は、「人間は自分自身の歴史を創るが、しかし、自分で選んだ状況の下でそうするのではなく、与えられた、過去から受け渡された状況の下でそうする」、という『ルイ・ボナパルトのブリュメール八日』(Marx〔1852〕)の有名な命題の中に見られる。このマルクスの命題は、A・ギデンス(Giddens〔1984〕)が構造主義と個人主義のジレンマを乗り越えようとしたときにとらざるをえなくなった出発点でもある。メタファーを使って説明すれば、横糸は縦糸の上にあらかじめ決定された場所からずれる可能性があり、そうなれば布に穴があいたりしわが寄ったりしてしまう!、ということになる。だから危機が存在するのであり、またレギュレーションの問題が提起されるのである。

ところで、軌道はなぜずれていくのだろうか? ごくわずかとはいえ人間に自由があるということを知るならば、「それは当たり前のこと」と答えることができる¹⁸⁾。また、軌道がずれることの積極的な理由を見出そうとすることも可能だ。軌道は等価の理論的正当性を有する二つの秩序からなっており、ケースバイケースで二つの秩序の重要性が変化するからだ。

まず、関係に対する外的な理由がある。重層的に決定された全体の中で、各行為者は複数の構造に属している。各人は複数の「ハビトゥス」を付与されており、ボルタンスキーやテヴノー(Boltanski et Thévenot〔1988〕)の言うような複数の「都市」と複数の「自然」に属しているが、こういったものすべてが各人の「行動様式」を決定する。

それゆえ、自分に割り当てられた場所や役割に対して、他の規範や利害の名の下で異議を唱えたり告発したりする、ということが起こりうる。「ある」具体的関係の形態も歴史もそれ自体、柔軟な性向を有する行為者に固有の行動様式に依存しており、またそれに適応していなければならない。それゆえ、ヘラクレイトスが言うように、「同じ川で二度水浴びすることはけっしてない」。つまり、同じような二つの愛など存在しないし、組立流れ作業のラインに同じような単純労働者が二人いることはないのである。というのも、そのような労働編成形態そのものが、女性であろうと農民であろうと移民であろうと、各自の物語とそれゆ

え自分の行動様式をもつ「適切に規律訓練された」労働者の存在に依存しているからだ¹⁹⁾。行為者の行動様式の可変性は、おそらく、彼らが共存している構造を相互に重層的に決定するもつとも直接的な媒介要因であろう。ヤッピー〔都会に住む高収入のエリートビジネスマン〕どうしの愛は、ブルジョワと無職の「年頃の娘」との愛と同じ次元の依存関係にあるわけではないのである。

関係の矛盾的性格から生じる原因、すなわち、諸関係に対する偏差の内的原因もまた重要である。おそらくそれは、危機の「可能性」や「必然性」を引き起こすという点でもつとも重要であろう。他方、関係の両極の差異は、そのもつとも単純な形態においても、外的原因を働かせる形式的条件となる。だが、われわれはここでは対立、つまり、関係の両極を結びつける闘争について話をしよう。偏差の内的原因は、自分にないものを他者が十分にあたえてくれないと誰でも必然的に不満をもつようになる、という恋愛関係の簡潔な定義から直ちに導き出される。危機の不可避的な形態はここから生じる。『ミザントロープ』では、アルセストが恋にあこがれセリメヌが巧妙であるにもかかわらず、幕が進むにつれ、愛をめぐる言い争いが繰り返される。相手愛しているのは本当だし、その幸せを思う気持ちも確かだ。しかし、それは自分自身が自己を「見出し」「実現する」ためなのだ²⁰⁾。賃労働関係の場合、関係の性質（付加価値の抽出とその分配関係）そのものの中に闘争や差異も当然含まれているのである。

それゆえ、図1と図2を総合したものは、当初に思われていた以上に複雑になる。軌道は場の再生産の要請からずれていく傾向にあり、したがって、われわれが「小危機」と呼んでいる「再調節」や「再編成」によって場の再生産が区切られていくことになる。

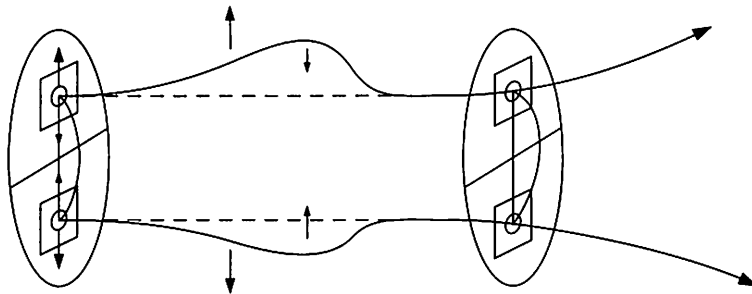


図4 小危機

『ミザントロープ』の第一幕では、口論が恋愛関係の統一性を回復させる。ここでよく観察しよう。矛盾する関係の二つの側面である「統一」と「闘争」そのものが、矛盾するカップルを形成している。「統一」と「闘争」との統一が存在する。つまり、闘争が統一を維持し、統一が闘争を維持する、というわけだ。依然としてアルセストは人間嫌いでセリメヌ

は愛想がよく、二人ともそれぞれ自己実現するための欲求が優位にあるが、そういった欲求は新たな偏差を生じさせ、その偏差が新たな言い争いを引き起こすことになる。弁証法を愛好する者がレギュレーションとすることで表すのは、この統一——関係する諸要因の「闘争」にもかかわらず、いやむしろその「闘争」を通じて、その「統一」が維持される——なのである。

このような考え方がカンギレームの考え方をどのように越え、かつ包摂するものなのか、ここで検討しよう。アルセストとセリメーヌは、個人としては「当初は見知らぬ他人であった」。だが、彼らの恋愛関係だけに関与するレギュレーションが、彼らの偏差を抑えたり取り除いたりすることになる。これらの偏差の一部は、恋愛関係に入る前にすでに二人の「行動様式」や「性格」が違っていた（ルシアン・ゴールドマン風に言えば、アルセストは「社交嫌い」でセリメーヌは「社交好き」である）ことから生じている。他方、恋愛関係のつねに矛盾する性格から偏差の蓄積が生じるが、それはレギュレーションの問題を提起する、関係に内的な原因である。ところで、レギュレーションの結果は超越的な「ルール」とか「規範」ではない。レギュレーションは内在的であって、関係の統一性そのものである。アルセストとセリメーヌの愛は、二人の絶え間ない言い争いの結果として存在する^{20bis}）。

ここに、われわれが慎重に避けてきた問題が提起される。言い争いという調整様式の目的原因説、機能主義、目的意識性、がそれである。実際、言い争いはもめごとを一掃し、その結果、統一性を立て直すのであるから、言い争いはこのように「事後的に」機能する、と言うことができる。言い争いは「事前的に」機能するのではないのだ。第四幕では、アルセストは別れるつもりで（彼はエリアントにそう言っている）セリメーヌと言い争いを始めているけれども、それまでうまく行っていたもの（好ましい口論）がまだなおつづくとは心の中で思っている。セリメーヌにとって、もはや口論は結びつきを回復するためのもので、予想され計画された清算であり、愛想を振りまきながらもアルセストを手離さないために支払わねばならないコストである、ということは明らかである。だが、多くの恋人達は、カップルの心理的駆け引きとか別離の繰り返しといった調整様式の制度化をとることがよくある。別離の繰り返しといっても、調整様式はさまざまに異なりうる。例えば断続的な別離が、規則的な言い争いの機能（たいていは、退出または発言）を果たすこともある。カップルの維持という結果が内在的にもたらされる場合もあるが、結婚（忠誠）という形で制度化される場合もある。制度はいかなるものでも、行為者が自分達の関係を中断したりその形態を大きく変えたりする自由を「一時的にはあるが決定的な」仕方では放棄する形態である。とはいえ制度化は、関係の矛盾的性格を少しも消滅させはしない。

従来の制度化された妥協とその調整様式が関係（あるいは関係のシステム）の再生産をも

はや維持できなくなったまさにその時期、つまり「闘争」が「統一」に優越するようになった時期を、われわれは大危機と呼ぶ。アルセストとセリメーヌにとって、大危機は第五幕ではっきり現れる。セリメーヌは勝手すぎたし、アルセストは言い過ぎた。「もはやこれまでのように続けていくことはできない」。弓の弦が切れてしまい、織物が引き裂かれてしまうのである。

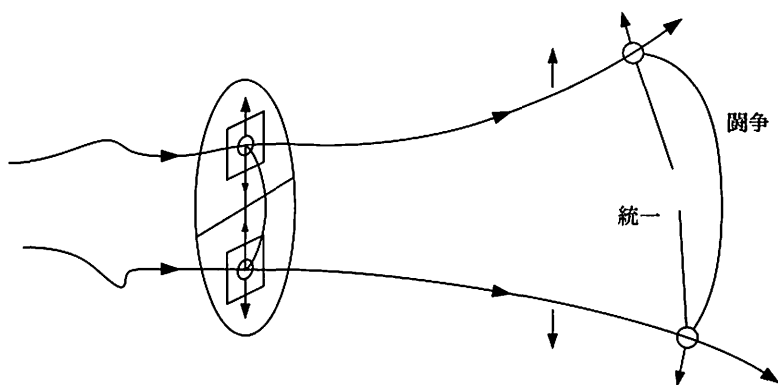


図5 大危機

三つの解決策がありうる。

1. アクターは別れる。もはや彼らの軌道が同一の物語の中で描かれることはない。これは「究極的危機」である。
2. 彼らは別の関係を結ぶ。「友達であり続けよう」。
3. 彼らは、これまでとは別の制度化された妥協や調整様式によって、同じ関係を結び直す。

セリメーヌは結婚という第三の解決策を提案する。アルセストは、結婚に同意するけれども人里離れたところで住もう、と交渉をもちかける。「まだ年寄りでもないのに、世捨て人になるのでしょうか」とセリメーヌは不安がり、それで二人の関係がおしまいになる。アルセストは第一の解決策を選択する。衝撃的な場面だ。なんと弁証法的か！ この大危機においても小危機においてと同様に、内的原因が（誰の目にも明らかな）外的原因によって隠されてしまってはならない。愛が壊れたのは、もちろん、アルセストとセリメーヌが「最初あまりにもなじみがなかった」からであり（カンギレームならこう言うだろう）、二人の「性格」が違いすぎる（一方は「俗界の外」におり、他方は「社交好き」で俗界にどっぷりつかっている）ために結局はどんな合意も協定もできなくなった（ボルタンスキーやテヴノーならこう言うだろう）からである。確かにそうだ。だが、そこにとどまっていたは、少し世間知らずというものだろう。セリメーヌは「別れるという」最後の言葉を言っていないのである。アルセストがチャンスに飛びついた」わけだ。熱い思いが認められたとき結局ヌム

ル〔ルイ・フィリップの次男〕の差し出した手を拒んだクレーヴ王女と同じように、アルセストは人里離れたところで住むことを選択した。アルセストは、絶対的な愛（「私が求めているすべてをあなたの中に見出すのと同様に、あなたも求めているすべてを私の中に見出す」）が不可能であることを認めることを選んだのだ。彼は、制度化された妥協とか合意、すなわち相対的なものよりも、愛の破局を選択したのであった²¹⁾。

だが、注意してほしい。恋愛関係にとって内的な、大危機（必ずしも終局的危機ではない）に結果せざるを得ないこのような矛盾は、文芸評論家や精神分析学者や社会学者にしか知覚できない。理論家（あるいはモデルの上に「恋の困難性」をつくり上げる劇作家）は、関係の「生理学」〔1〕、つまりその「内的」で「奥深い」、「深層的な」図式を分析する²²⁾。彼らは行為者の「行動様式」に関わることなく、関係をそれ自体として分析するのであるが、だからといって、行為者の「行動様式」を考慮してはならないとか、考慮しない権利があるというわけでは絶対ない。関係がつづくためには、行為者がそれを望まなければならない（あるいは甘受しなければならない）し、そのように導き導かれていく必要があるのだ。それゆえ、行為者を考慮に入れないのは、まさに構造主義の欠陥である。構造主義では、恋愛戦略のない愛や好戦的計画のない戦争、商人のいない交換関係や働き口を求める者のいない賃労働関係、といったものがあたかも存在しているかのようである。要するに、実体のないものが「場所」を占めているのだ²³⁾。こういった関係の特殊な実現としての一般的関係は、実践の抽象あるいは現実化として存在するにすぎないのであり、またそのような実践は、欲求が企てや実践に変換される限りで存在するにすぎないのである。

アルセストにとってもセリメーヌにとっても、再生産される恋愛関係など存在しない。あるのは、駆け引きや戦略を通じて発揮される恋愛感情だ。アルセストは、セリメーヌが自分のものになってほしい、自分と同じであってほしい（もしセリメーヌがアルセストと同じであれば、アルセストが彼女を欲しがることもないだろう、とわれわれは思うのだが）と望んでいる。セリメーヌはアルセストを手放したくない。彼女はアルセストが自分と同じであってほしいとは思っていないが、自分はいまのままでいたいと願っている。こういった二人の戦略は、第一幕から第四幕までは（繰り返しおこなわれる言い争いのおかげで）両立することができたが、その後はもはや「規則性を維持する状態 en régime」にとどまっていられなくなった。人間嫌いであるアルセストは、愛の物語がつづく限りは「社交界の中に」いたいと望んで、不器用ながらも一定の「慎重さ」を保持していた。彼はフィラントやエリアントといった友人の助力のおかげで、オロントを直接に侮辱しないように（そうすれば大危機は直ちにやってきたであろう）、また決定的にセリメーヌを失ってしまわないように、「ともかく」けなげな努力をしたのであった。アルセストはそれでも「ゲームをし」、カードに賭け、

社交界の生活や愛情顯示という規範を實踐しようとした。つまり彼は、「表面的な」、「外面的な」、「表層的な」規則、すなわち社交界の恋の規範に従ったのである²⁴⁾。こっけいさは、そのような規範に執着するのをアルセストの性格が妨げるところからくるのだが、彼は社交界の恋の規範を熟知しており、それを呪いながらも従おうとするのである。問題は、規範と彼の行動様式との組み合わせが、社交界の人々から大きくそれた軌道に彼を導いていくことだ。アルセストにとってもセリメーヌにとっても、幸せな愛がないために危機が訪れたわけではない。危機が生じたのは、二人とも「やりすぎた」からなのだ。

この物語は、縦系と横系の二重性の場合と同じように、二つの読み方ができる。深層では、愛は統一と闘争の周期的欲動の中に、つまり融合と自律の弁証法の中にある、と読めるし、表層では、愛は二つの独立した戦略のあいだの外的関係である、と読むことができる。言い争いは、これら二つの戦略を「愛の体制」内で調節する様式である。しかし、各人の賭けや希望、遠慮や慣行が手の施しようがないほど相容れなくなるときが来る。愛は変容するか消滅してしまわねばならないのである。

3. 過程する価値と蓄積体制

ここで、レギュレーションの観点からの分析で初めて用いられた「横系/縦系」の概念およびその二重性について、手短かに述べることにしよう。そのような分析としては、数理経済計画予測センターの共同研究 (CEPREMAP [1977]) と私の論文 (Lipietz [1979a,1983a]) があるが、以下の説明で、こういった経済学の研究とそれらに先行する認識論的考察との関係が明らかになるだろう。

『資本論』を読み返したエティエンヌ・バリバルは、資本家とプロレタリアートとのあいだの商品流通がいかにか賃労働関係という構造の再生産に帰着するか、ということを大いに強調していた。賃労働関係 (および、その関係がもたらす流通) の条件は、実際、その結果と同一のものとして現れるのである。

	A → P $\left[\begin{matrix} c \\ v \end{matrix} \right] \cdots M \rightarrow A' \cdots \left[\begin{matrix} A \\ Pl \end{matrix} \right]$				
資本家	貨幣資本	生産条件	生産された商品	貨幣	貨幣資本
プロレタリアート	労働能力	貨幣 v		生活必需品	労働能力
	F → v → M ⋯ F				

A : 貨幣, M : 商品, P : 生産, Pl : 剰余価値, F : 労働能力, c : 不変資本, v : 可変資本

図6 賃労働関係の再生産

ここには、図1と図2の重なりが見られる。アルチュセール主義者は、この図から主とし

て「垂直的」次元（場所のシステム）を取り上げた。実際、かの有名な再生産の「二重の巻揚げ装置」を得るためには、図を「正面から」（つまり、われわれの方に向かう時間の矢とともに）考察すれば十分であり、もはや縦断的に（左から右への時間的経過とともに）考察する必要はない²⁵⁾。

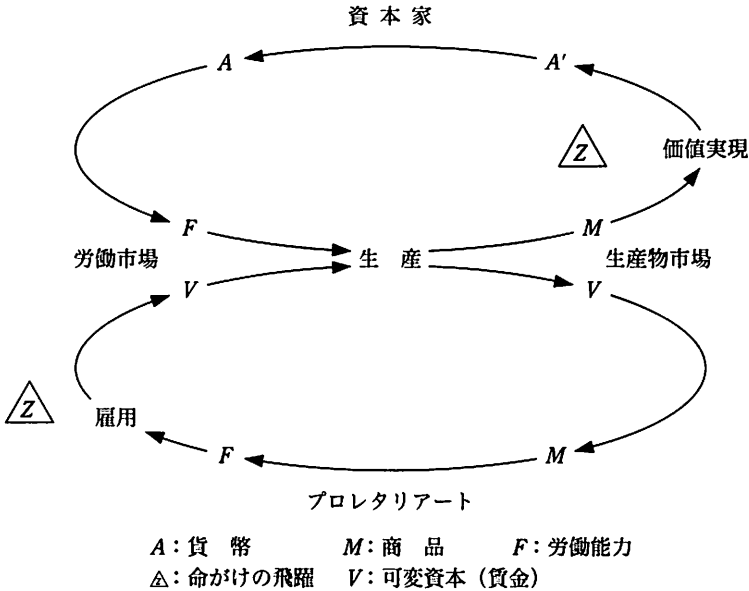


図7 再生産の「二重の巻揚げ装置」

この観点から見れば、再生産には実際のところ、「矛盾がない」ように思われる。したがって、「レギュレーション学派」の研究はいずれも、以下の三重の試みとして理解することができる。

- ・資本主義的再生産が「当然でも自明なものではない」ことを明らかにする。
- ・なぜ資本主義的再生産は長期にわたって「それでも」続けられるのか、を明らかにする。
- ・なぜ一定の期間を経てから大危機が発生するのか、を明らかにする。

こんにち、こういったことはよく知られている。第一に、商品関係という単純な現実、つまり、供給された商品の社会的有用性に関する資本主義的生産者の不確実性によって、商品と貨幣とのあいだに根本的な非対称性がもたらされる。貨幣が商品にとって「無条件の」一般的等価物であるのに対し、商品の貨幣への実現は「命がけの飛躍」——図4では「危険な曲がり角」を示す標識で表されている——である。図の北東口で流出する商品フローは、南東カーブで示される需要および表示されていないカーブで現れる需要、とりわけ「蓄積—投資」カーブで現れる需要（資本家による生産財の購入）と、（量および価値において）正確に釣り合わなければならない。この課題の不確実性は、危機〔=恐慌〕の「形式的可能性」

を形成する。危機〔=恐慌〕の可能性は、南東カーブから出るフローの増大を抑えることで北東口から出るフローを膨張させがちな蓄積自体によって、必然化する。このような矛盾が賃労働関係の核心なのであり、それを要約すれば次のようになる。つまり、搾取率が高すぎると過剰生産危機の恐れがあるし、搾取率が低すぎると過少投資危機の恐れがあるのだが、搾取率そのものが、一方では分配関係（消費ノルム）に依存し、他方では生産における変革（生産ノルム）、とりわけ生産性上昇と資本の有機的構成の変化に依存している。

生産ノルムと消費ノルムが両立可能な仕方では結合されて転換する様式を、われわれは蓄積体制 *régime d'accumulation* と呼ぶ。蓄積体制は、第 I 部門の付加価値、第 II 部門の付加価値、賃労働者の購買力という三者間の対応関係として描くことができるが、これは再生産表式、あるいはマクロ経済的構造と呼ばれているものである。レギュラシオン学派が明らかにしたように、「フォード主義的」蓄積体制は、生産性上昇、賃労働者の消費ノルム、資本の有機的構成という三要因の対応関係として描写できる。換言すれば、「フォード主義的」蓄積体制は、生産的労働者の数と連関する第 I 部門および第 II 部門の純生産量に比例して成長するような、賃労働者の消費の拡大をともなう内包的再生産表式に従っている、とすることができる。それゆえ、この蓄積体制は、資本主義的再生産を可能にする「縦系 *chaîne*」の形態なのである。

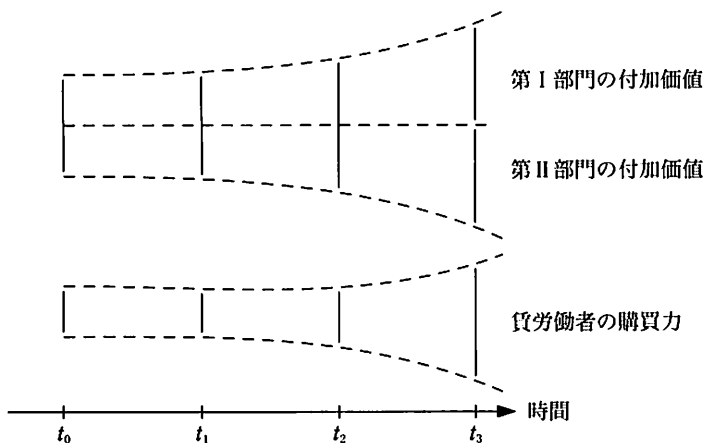


図 8 縦系としての蓄積体制

ところで、ここでもう一度図 6 に戻ろう。この図の縦断的な次元を真剣に考えることが重要である。われわれは行為者（資本家とプロレタリアート）を、「過程する価値」の所有者、すなわち、それぞれ継起的に形態を変換する価値フローを有する者として考えることができる。

$$\begin{aligned} & \dots A \rightarrow P \dots M \rightarrow A' \rightarrow P' \dots \\ & \rightarrow F \rightarrow S \rightarrow M \dots F \rightarrow S \dots \end{aligned}$$

ある形態から他の形態へと姿態変態するこの「過程する価値」という概念は、『資本論』第一巻第三章「貨幣の資本への転化」で導入され、第二巻「資本の流通過程」全体を通じて詳しく展開されている。このような無数の個別的フローが、経済的現実の横糸、すなわち過程する価値の「フロー」を構成する。「日常生活」(Alltagsleben)においては、そのような無数の個別的フローがまさに唯一の確かな現実なのだ。マルクスは資本に関して織物のメタファーの考え方を押し進めて、貨幣資本循環・商品資本循環・生産資本循環という、三本の繊維が巻きついてできた糸のような資本構造を示すに至る（『資本論』第二巻）。

過程する価値はその流れの中で自らの形態を変えていくのであるが、それは再生産の「二重の巻揚げ装置」の図7が時間の中で展開する際に見られるものと同様である。

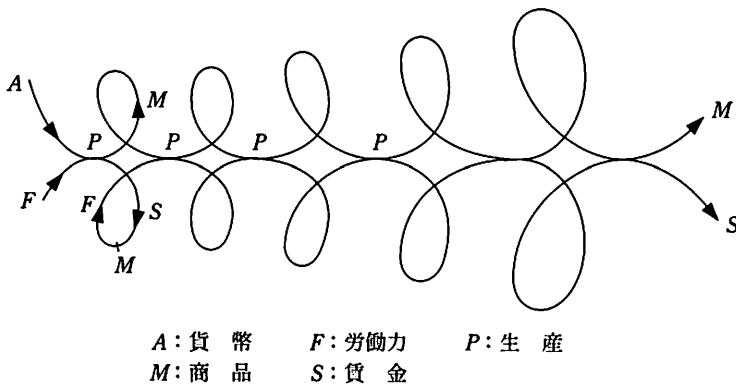


図9 過程する価値のフロー

この図の二本のスパイラルは、実際にはさまざまな個別的スパイラル、つまりフローから構成されている。このフローは「事後的に」、すなわち蓄積体制が安定したときには、その構造において、再生産表式によって繰り返し描かれる比率と正確に合致していなければならない。

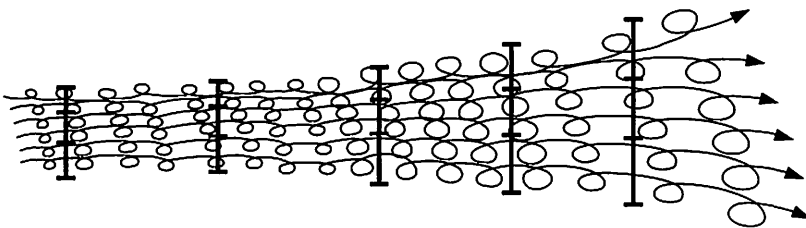


図10 過程する価値と再生産表式

『資本論』第二巻の再生産表式の有名なマルクスの等式 $I(v+m) = IIC$ は、このような二重性〔横糸としての「過程する価値」のフローと縦糸としての蓄積体制〕を説明しているにすぎない。このフローのそれぞれの瞬間的大きさ、換言すれば、貨幣で表現された名目価値でのこのフローを支配する法則を知ることが、さらに必要である。賃金や貨幣価格を決定するような法則は「外面的な関連」であり、それらは内的関連から独立したものとして考えられるフロー間の交換ノルムを調整するのである。行為者は、この標準価格を知り賃労働者と資本家のハビトゥスに働きかけながら、蓄積体制が維持されるように自分達の過程する価値を操縦していかねばならない。価値の生産価格への転化の一般的問題は、外面的関連（賃金と生産価格を定める法則）が価値に基づく蓄積体制の反復的比率と適合しうる条件を探求することだ、と解釈することができる²⁶⁾。

このような可能性があるからといって、良好な結末が保証されるわけではまったくない。賃金と利潤を決定する法則が生産ノルムの変化に合わなくなりさえすれば、不均衡が現れるのだ。その場合、過程する価値のフローは再生産表式の価値に基づく成長を「越えてしまう」か、あるいは逆に、潜在的な成長を下回ることになるように思われる。すると、経済という織物の中にしわや穴、つまり、インフレとか過剰生産といったものが現れる。それゆえ、フローが蓄積体制に適應するのか、横糸が縦糸に適應するのか、という問題が提起されるわけだが、そのような適應関係は、織物のメタファーでは糸の役割を果たし、また、アダムスミスの言う「見えざる手」の役割を果たす、現行の調整様式の結果としてもたらされるのである。

レギュラシオンの観点からの経済学的研究のすべての試み、とりわけ数理経済計画予測センターの共同研究 (CEPREMAP [1977]) とそれから派生したさまざまな研究が明らかにしたのは、この「見えざる手」が純粋な完全競争という超歴史的メカニズムではないということだった。時間の経過と共に、調整様式——とりわけ、直接賃金と間接賃金を決定する形態、企業間の競争および連携の形態、貨幣管理の形態——が変化し、したがって経済成長の形態や過程する価値の自己操縦形態も変化する。蓄積体制そのものが変化するために、調整様式の不適合から大危機が生じうる。そのような大危機 (20世紀末現在の危機、あるいは1930年代の危機) は、いわゆる「競争的な」諸様式におけるレギュラシオンの活動形態そのものである循環性の「小危機」と区別しなければならない²⁷⁾。フォード主義的蓄積体制にとっての「独占的レギュラシオン」のような、適合的な調整様式を確立しようとする「目的意識性」について言えば、われわれが明らかにしたように、それは歴史的にはたいてい「思わざる発見」であり、時間が経つにつれ、フォード主義的レギュラシオンについての「ケインズ主義」的理論家や改良主義的組合運動、さらに社会的コンセンサスを維持しようとする

政府などによって意識的に強化されうるものであった。

反対に、(例えば) フォーディズムの大危機がどのように現れ、「織物」がどのように引き裂かれたのかを理解するには、二重の研究作業が必要になる。すなわち、一方、深層レベルでは、生産性上昇の鈍化、資本の有機的構成の高度化、国際化の進展といったマクロ経済構造の漸進的な変形について明らかにしようとする。他方、「表層」レベルでは、社会経済的アクターが、発展モデルの論理の枠内で「もち札を改善する」ためにおこなう闘争の中で、また、この発展モデルと両立しえない「本当のモデル」の名の下にモデルを変えようという試みの中で、どのように「偏差を蓄積してきた」のか、ということ明らかにしようとする。労働組合は、賃金上昇をますます自動的に獲得できるものにし、福祉国家からの獲得物を強化しようと努めてきた。つまり、発展モデルの枠内での攻勢である。それでも賃労働者は、フォード主義的な労働編成の抑圧的・疎外的形態に対する抵抗を次第に強めていった。こういった傾向に対応するために企業家は、生産規模を拡大したり自動化を加速したりしようとする(フォーディズムの論理に内在する戦略)ばかりか、より利潤に有利な調整様式に基づく諸国に生産拠点を移転・分散させたり、労働市場の「二重化」によって社会立法をくぐり抜けたりしようとした。これは、フォード主義的な制度化された妥協を、そこから逃走(退出)することによって破棄する形態なのである。

危機に対するフォーディズムのさまざまな戦略がどのような結果をもたらしたかということは、よく知られている。残念ながらコンセンサスがぐらついてしまったが、やる気が少しありさえすればそれを防ぐことができただろう、などという話ではない、と理解することが重要である。矛盾はフォード主義的体制そのものにあつたのである。

4. 空間と時間の織物

恋愛と資本主義的蓄積について述べた後は、第三の領域である人文地理学を取り上げることにしよう。アングロ・サクソンの批判的地理学——そのすぐれた理論的集大成はグレゴリー／アーリ編の論文集『社会諸関係と空間構造』(Gregory et Urry [1985])の中に見出される——を参照すれば、従来の考え方が一変させられるだろう。この批判的地理学には、「理論的実在論」(Sayer [1985])と「構造化理論」(Giddens [1985])という二つの方法論的潮流が合流している。言葉の壁や間接的な認識、いい加減な翻訳といったことに起因する文化間の対話の難しさは、何らかの無理解に行き着いてしまうことが多いが、ソージャのすばらしい論文(Soja [1985])はそのような無理解を実際に乗り越えている珍しい例である。「理論的実在論」——それによれば、さまざまな事物にはその内的構造に帰すべき「潜在的原因」があるが、この潜在的原因はさまざまな事物の偶然的で文脈的な接合関係によつての

み現実化する——は、アルチュセール主義に対する批判にもかかわらず、アルチュセールの「重層的決定」と比べて真に新しいものをもたらしたのかどうか、われわれにはよく分からない²⁸⁾。また、ブルデューの「構築主義的構造主義」とギデنزの「構造化理論」とがどう違うのかも、よく分からない。しかし、この論文集のほとんどの著者（とりわけ Walker [1985]）は、両者は同じであるという点で一致している。

われわれの注意を引きつけるのは、横糸・縦糸というメタファーの直線的な利用である。批判的地理学の創始者であるヘーエルストランド (Hagerstrand [1970]) は、そのことについてギデنز (Giddens [1985]) やグレゴリー (Gregory [1985]) と議論している。ヘーエルストランドの「時間—空間の地理学」は、空間的・時間的物質性の制約に支配される行為者の個人的軌道の、慣習的な記述方法に基づくマイクロ社会地理学として表現される。さまざまな個人的軌道は、それらが相互に作用する「定常状態において」束になって合流する。これら軌道を空間面に投影すると、空間の構造化が生み出されることになる。

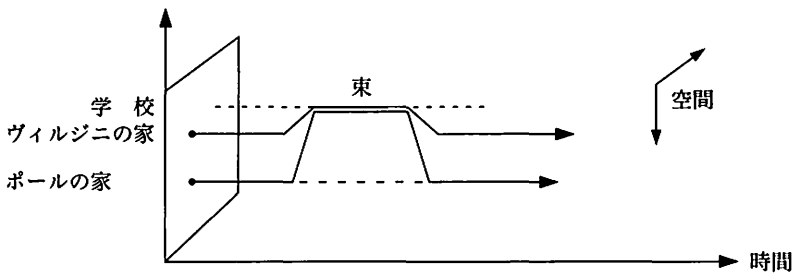


図11 ヘーエルストランドによる時間—空間経路の図表的表現

いつも学校に通っている村の若者（ポールとヴィルジニ）を例にとってみよう。「縦糸」によって構造化された（そして「縦糸」を構造化する）軌道としての「横糸」、すなわち村の定常のシステムが見られる（図11）。このシェーマを「小危機」におくこともできる。例えばポールがヴィルジニを植え込み B にある秘密小屋に誘うが、うわさ話が広がってやんちゃ坊主とそのシンデレラは直ちに通常の軌道に連れ戻される。告げ口と制裁は、社会的レギュレーションのもっとも本源的な形態である。だが、通常の軌道からの偏差が大危機まで発

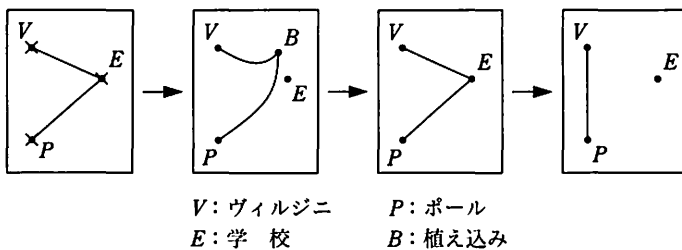


図12 ヘーエルストランドにおける偏差・小危機・大危機

展する可能性もある。例えば二人が婚約して学校をやめてしまう（図12）とか、二人が寄宿舎に入れられてしまう、といったことにもなりうるのである。

ヘーエルストランドの「時間—空間の地理学」の操作的性格はよく理解できるし、また、この地理学が例えば交通システムのような都市工学的投影法（Matzner et Rusch [1976]）につながっていく可能性もよく分かる。にもかかわらず、ギデンズはヘーエルストランドの地理学の弱点を指摘する。ヘーエルストランドの地理学は軌道を方向づける「企て」の源を無視するが、そうなるに企ては「すでにあたえられている」定常点そのものによって導かれるわけで、われわれは「縦糸」による全面的決定に縛られることになる、というものだ。ギデンズは定常点を、ゴフマン（Goffman [1959]）が分析している「過去に拘束されない現在の柔軟な性向」（現在の利用可能性）を備えた「ローカルなもの」に代えるべきである、と提案する。先の例では、植え込みが、「女の子をものにする」——その成功は村の若者の恋愛における創意工夫に依存している——柔軟な性向を表している。しかし、植え込みはそのようなイニシアティブより前から存在しているのであって、このことが位置決定の「マイクロ社会学的基礎づけ」をすべて禁じてしまうのである²⁹⁾。

グレゴリーに関して言えば、彼は、空間的横糸を資本主義的構造の機能主義的必然性に還元してしまう傾向について（いまや読者に親しみやすくなったはずのテーマに従って）批判する。彼は、（イノベーションの絶えざる運動によって引き起こされる構造化の慢性的不安定性に基づく）これとは対照的な傾向、横糸の動きの中に糸のもつれしか見ない傾向にも、同じように警戒する。グレゴリーは、矛盾や闘争を構造化そのものの中で考える必要がある、という結論に至る。ここでグレゴリーは、ヘーエルストランドが超えられなかったであろう集列性〔バスを待つ人々のように、バラバラな諸個人が共通利害を軸に受動的に統一されてできるあり様〕というサルトルの概念を導入するが、それだけにこれはフランス人にとって馴染みあるテーマである。「融合した集団」の状態に対立する「集列性」（Sartre [1960]）は、構造を変容させようとする集団的企てができない諸個人の状態であり、「逸脱〔＝偏り〕」を奪われたデモクリトスの決定された原子のように行動するのだ。だから、「縦糸」を必然性と同一視し、「横糸」を自由と同一視しないよう、気をつけよう！ われわれは、結局この点に戻ることになるだろう。

ここでは、これまでの私の研究から、横糸と縦糸の区別と連関やレギュレーションの問題について人文地理学とは別の領域で明らかにする二つの例を出して、それらをもっと発展させていきたい。

第一の例は地域問題、というよりむしろ地域間問題であるが、私はドリーン・マッシィとそれについて友好的な意見交換をすることがある。最初の対談（Lipietz [1974a,1977]）で

は、私はフランスの諸地域を、まずその系譜とか、[・][・]内的社会関係の歴史——この歴史は、諸地域の「個性 *personnalité*」(ヴィダル・ド・ラ・ブランシュの用語)をつくり上げ、私が後に「フランス式フォーディズム」と呼ぶことになるものを特徴づける、1945年以降の分業形態とは異なる柔軟な可変性を諸地域にあたえた——によって定義した。労働編成形態としてのフォーディズムは実際に、構想、熟練を必要とする製造、熟練を解体された組立作業という三つの活動を分離する。賃金、労働組合組織率、労働力の熟練度、市場等の観点から見てきわめてさまざまな雇用供給源をもつフランスでは、フォード主義的な労働の三分割に照応する労働力供給源の三つのタイプに基づいて産業部門内回路 *circuit des branches* を展開したい、という誘惑が大きい。地域が自ら産業雇用を「要請した」こと、あるいは国土整備地方振興庁 (DATAR) が大企業の誘致を導いていったことは、まさにその産物である (これはレギュラシオンの問題であるが、それについてはここで議論しない)。それゆえわれわれは、産業部門内分業の構造との関連で規定された三つのタイプの地域を定義することができる。典型的な例をあげれば、Iタイプはイール・ド・フランス、IIタイプはノール・パ・ド・カレ、IIIタイプはグラン・ウエストである。とはいえ、一部の地域は、過去から継承された「スタイル」に照応しながら、産業部門内分業の構造の中で規定された「役割」を担っている。

ドリーン・マッシィ (Massey [1978]) は、横系による議論と縦系による議論とのあいだの曖昧さを、直ちに次のように批判した。「リピエツツにあっては、諸地域はその系譜の中でそれ自身において規定されるときもあれば、地域間分業の中に占めるその共時的な場によって規定されるときもある」。マッシィにとっては、このような構造の「縦系」を過度に単純化しすぎない限りで、また、複数の労働編成形態——それらは部門ごとに違ふし各部門の中においても異なっているが、各地域の将来を歴史的に形成されてきた「諸層 *layers*」の累積によって説明する際に偶然に結びつく——の存在を認める (私は喜んで受け入れる) 限りで、第二の選択肢、つまり縦系による議論が唯一有効なものであった。彼女はこの方法を自著 (Massey et Meegan [1982]) に適用したが、地理学が産業組織論に還元される傾向がそこにあることを私 (Lipietz [1983c]) はすぐに読みとった。私は以下のように反論した。系統的に蓄積されてきた「諸層」から受け渡された地域の個性やその柔軟な性向^{ディスゴビリティ}を考えないのであれば、産業再編成に直面した諸地域が対照的な形で成功していくことをどのように説明するのか? 衰退しつつある熟練産業の地域は、「人的資源」の動員によって再転換されることもあれば (例えばリュール地方)、熟練を解体された産業に変わっていくことも (例えばノール地方、といっても少し違ふが)、周辺化されることも (例えばロレーヌ地方) ありうるのだ。成功の形は多くのことに依存するが、まずは革新的な地域ブロックが形成され

るか否かにかかっている……（Lipietz〔1985b〕）。

マッシイ（Massey〔1985〕）は私の批判の正当性をしっかり認め、産業地理学の歴史的総括（この論文の初めに書いた「構造と行為者」の揺れという要約ときわめて類似している！）の後には、結局、先に存在する空間的現実が地域間の再構造化過程において重要である、と確信することになる。「地域の個性が新しい企ての背後にある」という表現は、ブランシュ〔フランスの人文地理学者〕の言う地域的個性を想起させるものだ！

ところで、国際経済関係の場合、全体性の構造に対する各国の軌道の自律性は（地域間の経済関係の場合に比べて）はるかに大きい、ということをお前は証明しようとした（Lipietz〔1985a〕）。各国の自律的蓄積体制（ここでは「横系」の役割を演じている）間の（人や商品、知識、資本の）移動を通じて漠然とした規則性が形成される、という「国際的構図」（「縦系」のきわめて軟化した形態）の概念を、古典的な「中心／周辺」構造とか、フォード主義的三分割から思いついた新国際分業の正統派（Fröbel, Heinrichs, Kreyes〔1980〕）に対置させる必要がある。私は、何がこのような横系・縦系の二重性の調整形態であるのか、また何がそれらの危機の調整形態であるのか——貿易協定、超国籍企業、国際信用、等々——、ということについて研究しようとさえした。

だがここでは、先の例を使って空間のレギュレーションの問題に取り組むことにしたい。都市地代の変化について考えたい。私は、構造主義の影響を強く受けた地代に関する初期の研究（Lipietz〔1974b〕）において、空間の経済的・社会的分割（ここに労働者がいてあそこにはプチ・ブルジョワがおり、そしてあちらには上層のサービス業従事者が住んでいる、等々）という「縦系」が存在することを前提していた。こういった空間の経済的・社会的分割は、不動産開発業者の慣習行動^{フラティック}によって再生産されたり変換されたりしていく。だが、不動産開発業者はそのような場所に何を建設すべきなのか？ 以前から存在していた空間の経済的・社会的分割の結果として土地価格が決まるメカニズム（「外因性の差額地代」）のために、不動産開発業者はその地区の社会的利用を再生産したり、せいぜい、隣接するが以前は離れていた地区に「上流階級的な」土地利用を類似的に広げたりしていかざるを得ない、ということをお前は明らかにした。しかし、そうだとすれば、地区の社会的利用を一挙に変えてしまう、あるいは少なくとも、複数の（私的および公的な）アクターを調節する長期計画に基づいておこなわれる都市の大改造は、どうなるのだろうか？ その場合、地代（いわゆる「内生的な内包的地代」）を、企画された空間の産物に応じて行為者のあいだで分け合わねばならない。行為者は将来の協業の成果を内部化しており、獲得される変化の果実を分け合うのである。私はその後の論文（Lipietz〔1975〕）の中で、このような空間の再生産と転換の二つの形態を、レギュレーションという用語をまだ使わずに、それぞれ「競争的」形態と「独占

的」形態と呼んでいた。

換言すれば、「競争的／独占的」という対は、「横糸」の行為者が彼ら自身の慣習行動^{フラティフ}と共に変形する縦糸における関係を調整するために有する二つの様式を思わせる。「縦糸」を「すでにあたえられたもの」として捉えるなら、各人は彼らの表象空間の「地図」（ここでは土地価格）を通して、構造の再生産やその部分的変形の一因になる「合理的」決定をおこなうことができる。他方、表象空間の「地図」が、明確に調整された行為者自身の行為によって実現されうる縦糸のマクロ変容を先取りしてしまう場合、この集団的に企てられた空間は個人的企ての経済的景觀^{ベイザージュ}と化してしまう。こうなると、空間—時間のメタファー（織物のメタファー以外に何があるか？）はメタファー自身の中に封印されることになる。

結論に代えて

これまで述べてきたことを、以下のように要約できる。フローの中で一定の規則性を表す社会的過程に関して、二つの見方がある。第一に、そのような社会的過程は、関係あるいは相互に重層的に規定された複合的關係が時の流れの中で再生産されることだ、と説明することができる。第二に、相互作用の結果に関する表象に応じて自分自身の目的を追求する行為者の個別的軌道の並列および相互作用として、社会的過程を理解することもできる。ここでは、そのような表象が適切かとか、行為者の活動の一貫性は彼らの意識的目標と比べてどれだけ歪んでいるか、といったことはどうでもいい。また同様に、関係が階層的（抑圧的）であるか協同的であるか、ということも問題ではない。

すべてが順調に進行している限り（現象が「規則性を維持する状態で」再生産されている限り）、これら二つの解釈は互いに共存し合っている。行為者の企てもその制約も、ハビトゥスおよび構造の再生産自体によってもたらされる表象空間の産物なのだ。だが構造は、個人的諸軌道の観察された両立可能性を概念化したもの以外の何ものでもない。二つが一緒になって織物に一貫性をあたえる縦糸（関係の再生産）と横糸（個人的軌道）というメタファーは、このような二重性を把握することをめざしているのである。

諸関係によって「演出される」行為者が社会的再生産の要請に対して分岐するような行動をする能力とか傾向を有しているからこそ、事態はおもしろくなる。こういったズレは調整様式によって解決されるが、それはズレが「大危機」に至るほどに蓄積されていない限りでのことである。（レギュレーション「の中の」）小危機そのものが、構造を歪める一因となり、結局は大危機に至らしめることになる。

偏差や危機があるからといって、けっしてそのことで構造あるいは行為の一方が他方のためになくなってしまうわけではない。その逆に、偏差や危機は、これら二つの側面の自律性

や非還元性、望むなら「現実性」を明らかにするのである。構造のない偏差などありはしないだろう(実際、カオスが存在するだけだろう)。ルーチン化した行為や基本的妥協(自主的な妥協にしろ従属にしろ)のない構造などないだろう。さらに、行為者の自律性を、そして個性化の可能性さえをも説明する必要がある。われわれは個人や集団が「行為者」になりうる可能性を認めているだけに、いつそうそうしなければならないのである。

構造によって規定された「場所」で独自の「行動様式」に従ってある「役割」を果たす行為者の個性化は、第一群の問題を提起する。恋人、社会階級、地域といった関係によって、個性化された「即時的な」場所のシステムが規定される。しかし、これら「諸個人」が「対自的に」行動できるかどうかは疑わしい。階級の場合にしろ、大企業の場合にしろ、地域の場合にしろ、このような個性が集合的なものであるとき、当然のことながら、社会的凝集性の問題や「集合的意識」に関する問題が提起される(権限委任論、エージェンシー論、ヘゲモニー・ブロック論のようなさまざまな理論がこういった問題を説明しようとしている)。だが「個人」が人間の個人であるときは、精神分析におなじみの「主体の分裂」(Ichspaltung)が、主体としての個人の不安の総計と同じ数だけ問題を提起する。アルセストは人間嫌いの自己と恋する自己とのあいだで引き裂かれている。つまり、矛盾的關係はその両極で矛盾の結節点を対立させているのである。国民的蓄積体制は時間と共に再生産される矛盾であるが、しかし世界的構図の枠組みにおいては、他の国民的蓄積体制と対立的関係にある個性として考えることができる。行為者に固有の「行動様式」は、彼らを外部においても内部においても規定する、関係の結び目から生まれたものなのである。

確かに個人は階級とか国民といったものではないけれども、いずれにせよ合理的個人主義を有する原子に還元することはできない。実際に、現実の階層化された組織を引き合いに出してみよう。そこには、賃労働者を資本に対して外的に重層的に決定される生きた矛盾と考えるべきか、それとも、外部決定を受け継ぐ「行動様式」で占められた賃労働関係における場所と考えるべきか、という「内的原因」と「外的原因」の問題が見られる。相対主義は、妥当性の基準との関連においてしか解決されないものである。

このような第一群の問題は、「重層的決定」という概念の重要性を想起させるためのものであった。「アクター」は複数の諸関係に属していたり、あるいはアクター自身が関係を凝縮させたものであるので、彼らは、つねに前もってあたえられた「個性」を身につけながら、一定の仕方で彼らを規定する関係の中に入っていくのである。「個性」は、アクターがそのような関係(恋する気難しい人、大英帝国、女性労働者階級)に入っていくこと(そしてこの関係にとどまること)によって変容するが、また「個性」は、特殊な具体的形態を関係にあたえることを通じて、関係を修正し転換させていく。例えば、専門的な自由業が賃労働

働制度に統合されることで、賃労働者労働者階層の規範は変容せざるをえなかったのである。

個性が認められるのであれば、行為者の自律性はその役割との関連で言えばどういうことになるのだろうか？ 個性があるが故に関係によって規定されないもの——異なる「性格」の人との関わりや、他の諸関係による重層的決定——について思い起こしてみれば、簡単だが一般的に正しい回答が見つかるだろう。若者はテイラー主義を拒絶するが、それは彼らには別の関心の的があるからだ。セリメーヌはアルセストの言うことを聞かなかつたが、それは彼女がサロンで楽しんでいるからだ。関係の矛盾そのものや諸個人の自由への抑えがたい欲求を思い起こしても、先の回答とは逆になるがやはり正しい答が見つかるだろう。テイラー主義は人間的尊厳の（そしておそらく生産効率の）否定なのだ。また、愛が個性を消し去ることを（個性を消し去ってからの愛の存続をも）正当化することはできないのである。だが、世界がカオスでない限りは、関係にふさわしい行動が一般に支配的になる。そのような行動が支配的になるとき、行為と構造は横系と縦系の二重性によって固定されるとはいえ、もはや、縦断的（通時的）あるいは横断的（同時的）といった方法論的観点から区別されるしかないのである。

われわれはそこで、もっとも深層のレベルでは構造と行為とのあいだに矛盾があるのではない、という根本的な点におち当たる。矛盾は行為そのものの中にある。行為の慣行化され物象化され再生産される側面（二重性で考えれば、すぐに構造ということが浮かぶ）と、おそらく行為の潜在的にずれた、革新的、自律的、生成的、革命的な側面、少なくとも創世的な側面とのあいだに、矛盾が存在するのである。これこそ、ルクレティウスやエピクロスが「直線からの偏り」という考え方を使って、またカール・マルクスが「フォイエルバッハに関するテーゼ」の中で、さらにカレル・コシークが「対象的主体」の弁証法において、そしてジャン・ポール・サルトルが『弁証法的理性批判』の第一巻『実践的総体の理論』の中で、あるいはピエール・ブルデューが「発生論的構造主義」の定義において、焦点を当てた矛盾である³¹⁾。

過去のはるか昔のルーチンの重みが現在のわれわれにのしかかっているが、それはちょうどアマゾン川の上流の沖積土がその河口を何百キロメートルにもわたって染めているのと同じである、とフェルナン・ブローデルが晩年に述べている。過去から受け継いだ所与の状況〔＝諸条件〕の下で創る歴史において人間が有している「逸脱〔＝偏り〕」する権利は、おそらく95パーセントの必然性に対する五パーセント（あるいはそれ以下）の自由にすぎないだろう。とはいえ、新しい社会形態を要請し創出していくのは、この5パーセントの自由なのである。多分、もっともうまくいった場合のことであるが……。

注

- 1) 私はここで認識論的命題ではなく、存在論的命題について言及しているにすぎない。私の本稿での議論は「古典的」アルチュセール主義、すなわち『資本論を読む』(Althusser et al [1965])のアルチュセール主義に限定される。詳しい議論としては、Lipietz et Rouilleault [1972], Lipietz [1973,1979a]を参照せよ。
- 2) 1974年のこのセミナーの後で公開されたアグリエッタの『資本主義の調整と危機』(Aglietta [1976])においてもっとも重点が置かれているのは、彼の研究の中で次第に重要性を増すことになる商品関係である。
- 3) 機能主義的なレギュレーション概念を除去し、レギュレーションを弁証法で基礎づけるために、私は1979年の拙著(Lipietz [1979a])においてかなりのページを費やした。アグリエッタは『資本主義の調整と危機』の第二版で、Boyer [1987]と同じように、機能主義に対する批判に賛意を表明している。それでも私は、以下のことを指摘しておかねばならない。機能主義、すなわち、メカニズムや機構の結果はその存在の原因であるという信念から研究者を守らねばならないが、探求の途上では、例えば未知の装置を分解するとき、機能主義の二つの基本的設問——「それはいったい何の役に立っているのか?、それはどのように準備されるのか?」——を定立することは有効なのである。
- 4) 例えば、Organum de l'Encyclopaedia Universalisを参照せよ。
- 5) Guillaume (éd) [1987]を参照せよ。
- 6) ランシエールは『社会学者の帝国』に収録された論文の中で、ブルデューの社会学を『資本論を読む』におけるかつての自分自身の立場にいと簡単に還元して、次のように述べている。「行為者の実践的意味は結局のところ理性の策略にすぎない。システムがその存在を再生産するのは、システムが錯認されているからである」。ところで、行為者や行為や実践を再導入する、ブルデューの「実践的感覚」、「ハビトゥス」、「戦略」は、レヴィーストロースによれば、「どこにでも転がっている体のものであり、当節流行の自生主義と主観主義に裏付けられている」、構造主義に対する批判に属するものである(cf. Bourdieu [1987, pp.77-78]. 邦訳100頁)。
- 7) <Le mariage dans la société du haut moyen-age>, Duby [1988]を参照せよ。
- 8) L・ボルトンスキーは『管理職』(Boltanski [1982])の中で、再生産についての機械論の見方に反対して、ハビトゥスの概念によって表される発生論的で変革的でさえあるあらゆる潜在的能力を展開したが、だからといって、地形学の基底に地質学があるように「階級闘争」の基底に(マルクスの意味での)搾取関係がある、ということをおぼえているわけではなかった。しかし残念なことに、ごく最近の著作(Boltanski et Thévenot [1987])は、巧みで示唆に富み「操作的である」けれども、社会諸関係についてもつばら「外面的な」(表層的な)アプローチ、すなわち個人主義的なアプローチに傾斜しているように思われる。われわれは後でこの点に立ち戻ることにする。(全般的変化に照応する)これと同じ方向転換はAglietta et Orléan [1982]にも見出すことができる。私はLipietz [1983a,1983b]において、アグリエッタやオルレアンとの見解の違いを展開した。
- 9) ボルトンスキーとテヴノは革新的な著作(Boltanski et Thévenot [1987])において、「方法論的個人主義と方法論的集団主義」とのジレンマを乗り越えようと努めている。より正確に言えば、彼らは「正統性の問題を偶然性やごまかしや暴力による説明のために放棄するのではなく、正統性の問題と真剣に取り組むことを通じて、社会の構成員のあいだでの合意の可能性という社会科学の中心問題」(p.x)を議論することに努めている。そのようにして彼らは、政治理論や礼儀作法の手引きの中に収録されている合意の諸形態の文法を作り上げる。このような合意は、「都市 cités」や「風土 natures」に照応する。この著作の最初のところで、都市の形態が唯一の可能な形態ではない(「宇宙」や「混沌」が存在しうるが、それらは、社会秩序についての合意に達するような、平等な権利に基づく「人間の共同

- 体」を無視している)、ということがきちんと指摘されている。しかし、著作が展開するにつれ、そのように留保されていたことが忘れられてしまう。「人間の交通」の条件は最終的に個人間の合意の形態をとる。彼らの議論は結局のところ、社会諸関係に内在する対立的性格を除去してしまう方法論的個人主義の変種に帰着する。彼らの議論は、「合意による服従が、紛争によって成就されるような現実の状況」を研究するというブルデューの意図 (Bourdieu [1987] p.55. 邦訳70頁) から後退しているのである。
- 10) われわれはここで、認識論という言葉について語らねばならない。アルチュセールは、経験批判に対するレーニンの批判に儀礼的な敬意を示してはいるが、現実の具体性と思考の具体性とを混同することはなかったし、また、抽象的關係が偶然性の不純物の中に埋めこまれる形で経験的現実の内部に存在する、と考えることもなかった。しかし構造主義は、基本的構造によって「上演される」行為者の神秘化された振舞いよりも現実的な、隠された基本的構造の存在を信じるようになった。私は [Lipietz, 1985a,1985b,1987b] において、「フォーディズム」や「周辺部フォーディズム」といったレギュラシオン学派独自の概念的な定式化を含む、この「概念実在主義」の危険性について批判した。
- 11) 演劇の例には複雑さが入ってくる。なぜなら、演劇は解釈の連続からなっているからだ。「ミザントロープ」も「風とともに去りぬ」も、物語図式はかなり似通っているのであるが、作者は登場人物にきわめてさまざまな個性を付与する。それから演出家と俳優が、そのような個性を彼ら自身のやり方で解釈するのである。
- 12) それは、たんにアフリカ研究者が分析する親族社会や分節社会の場合ばかりか、中世のフランス貴族 (Duby [1988]) の場合や、さらにベアルヌ人の農民の場合にも当てはまる。劇作家マリヴォーにおいてやっと消えるような、古典演劇の中心にあった親族関係から独立して、恋愛関係が「純粋に社会的なものとして」現れる、という意味で、「ミザントロープ」は重要な文化革命であった (Lipietz [1988] を参照せよ)。
- 13) 「あなたの眼がほんの一瞬でも私を見ることができれば、眼だけで十分に納得されるでしょう」(ラシーヌ「フェードル」II,5)。
- 14) 社会諸関係の知的コード化の重要性、すなわちブルデューが「理論効果」(Bourdieu [1987] p.93, 164. 邦訳121頁、217頁) と呼ぶものについては、Lipietz [1985b] を参照せよ。
- 15) 場所、役割、行動様式のあいだの区別については、J・ジェンソンとの長きにわたる実り多い議論に負うところが多い。われわれは、俳優が自分の役割を務める彼独自の流儀を「行動様式」と呼ぶ。この固有の性格は、関係によって決定されるのではけっしてない。それは、俳優の経験や彼が参加する他の「さまざまな役柄」によって決定されるのである。
- 16) 「それにしてもなぜ習慣とは言わないのでしょうか？ 習慣ということで自ずと考えられているのは、反復的、機械的、自動的なもの、生産的よりもむしろ再生産的なもの、といったことだからです。ところが、私が強調したいのは、ハビトゥスとは何か強力な生成母胎であるという発想です。ハビトゥスとは、簡単に言えばいろいろと条件づけられた産物であり、それを条件づける客観的論理を再生産する傾向をもっていますが、にもかかわらずその客観的論理を変えてしまうのです。それは一種の転換装置みたいなものです」(Bourdieu [1984] p.134. 邦訳170頁)。
- 17) K.Marx, *Différence de la philosophie de la nature chez Démocratie et Epicure*, Ducros, 1970, p.243. (『デモクリトスとエピクロス』の自然哲学の差異) 『マル=エン全集』第40巻210頁)
- 18) 「冷たい」社会においてさえ、追い払わねばならない悪魔による「魔術」や「悪魔憑き」に対する非難や嫌疑は、往々にして微細な逸脱の出現をめざすためにおこなわれた。
- 19) ロベール・リナールは『仕事場』(Linhart [1987]) の中で、流れ作業の外で同僚に出会えばすぐに誰か分かる、と指摘する。だが彼は、流れ作業に従事する者が誰でもいいというわけではないし、流

れ作業が取るに足りないものと考えられているわけではない、ということも述べている。これをさらに進めれば、次のように言うことができるだろう。資格をもち、「生産過程に参画する」用意のある労働者を自由に利用できる資本主義経済では、資本家の立場からみても、テイラー主義原理を極端に押し進めることは「効率的」なことではない、と。

20) 「自己を実現する」という表現は、時代遅れと非難されるかもしれない心理学から借りてきたものだ。ここでは、交換において商品の有効性が認められることを意味する「実現 *réalisation*」に準拠してこの表現を用いている。

20bis) これこそ、「ゲーム」のメタファーが慎重に利用されるべきだ、ということの理由である。ブルデュー (Bourdieu [1987] p.82. 邦訳105頁) が指摘するように、(慣習的または法律的な)「法則」が存在していても、(内的な)社会的「規則性」はけっして(超越的な)「ゲームの規則」ではない。規則の超越性を意味することを回避し、それゆえ、ゲームの規則をゲームの進行中に漸次的に修正する可能性を行為者に残しておくために、Bowles et Gintis [1986] は「規則の再帰性」について言及する。ボウルズ達の議論の難点は、われわれが本稿で「関係」、「体制」、「調整様式」、「軌道」として区別しようとしているものを同じものに平板化してしまい、その結果、体制に対する偏差がどのように危機に至るか、また、レギュレーションの問題がなぜ提起されるのかについて、もはや理解できなくなる恐れがある、ということである。例えば、アルセストは最初のけんか以来エアントの腕に身を任せている、あるいは、いらだつセリメヌはアルセストを「見捨てる」と想像することもできる。しかし、それはもはや同じ物語ではないし、同じ恋愛体制でも、同じ関係でもないだろう。

21) Boltanski et Thévenot ([1987] chap.41) は「もめ事」の発生や合意の「破棄」を、合意についての非弁証法的な考え方に照応させて、行為者が複数の「役割」に参加する可能性によって説明することしかできない。それゆえボルタンスキーやテヴノーは、『資本論を読む』の中で危機を相互に外的な諸関係の働きによってしか説明できなかったバリバールの構造主義的見解に接近する。反対に、Aglietta et Orléan [1982] の「対立を強調する」方法論的個人主義には、危機と調整の必然性および矛盾をそれぞれの関係の内部に求めるという利点がある。対立を強調するアグリエッタとオルレアンの方法論的個人主義は、「暴力と聖」についてのルネ・ジラルールの理論の影響を受けている。問題は、ジラルールが恋愛関係の文学的取り扱いに関する彼の研究 (Girard [1961]) を過度に一般化しているだけだ、ということである。恋愛関係は、ダ・ポントが「私は自分の外に幸福をさがしているが、誰がそれをもっているのか、幸福が何であるのかも分からない」と描いたようなものである。これを経済に転調するならば、貨幣への投機があるにもかかわらず事態はうまくいっているとしても、問題はそういうことにあるのではない、ということになるだろう。

22) マルクスの著作における深層的と表層的との区別はほとんど注目されていないが、重要である。この点については、Lipietz [1983a] を参照せよ。

23) 「社会科学を不断に脅かす主知主義的・理論主義的誤り (民族学の場合は、「私の方が、現地人よりも、現地人が何者かをよく知っている」とうそぶくような構造主義的誤り) (Bourdieu [1987] p.114. 邦訳151頁)。

24) 社会学は経済学と同じように、「表層的 *exotérique*」世界、すなわち、行為者の日常的経験の世界 (例えば『資本論』第3部の対象) を説明しなければならない。それは、同じ社会関係の中で異なる場所を占めている他の行為者をそれぞれの行為者が知覚する世界である。それぞれの行為者は、他の行為者を表層では、それを通じて「相互作用がおこなわれる」表象 (= 上演) 空間の諸要素として知覚する。この世界は解明されねばならない明白な法則をもっているが、そのような法則が深層的世界 *ésotérique* と二重の依存関係にあることを忘れてはならない。「社会学は秘伝的な科学です — 基本の習得には時間がかかり、世界像全体の真の転換が要求されています — が、秘伝的ではなく、一般向

けという外見をしています」(Bourdieu [1987] p.68, 邦訳88頁)。ここから、(私が『ミザントローブ』の分析によって明らかにしたように) ボルトンスキーやテヴノーの術語の魅力や彼らの術語を使いたくなる誘惑が生じる。私の危惧は、ボルトンスキーやテヴノーの表層の世界についての術語が秘伝的〔深層的〕社会学をまったく包括できない、ということにある。

- 25) ここで問題になっているのは言うまでもなく、蓄積—投資に関わる「資本家間」の回路や賃労働関係の再生産に連結する他の社会諸関係 (例えば、M→Fのレベルの家父長制) を捨象した図式である。
- 26) 生産ノルムが一定で、行為者の行動と表層的法則 (部門間利潤率の均等化、付加価値配分率一定の場合) が所与であるならば、蓄積体制と価格体系が同時に決定されることを証明することができる (Lipietz [1979b])。この証明は、フロベニウスの定理とブルーの固定点定理を組み合わせている。したがって、それは存在についての定理であって、非安定性についての定理ではない。
- 27) 二つの違ったタイプの調整様式を区別するために、競争的／独占的という必ずしも適切な術語ではない対概念を提起したことについて、本稿の第4節で説明する。
- 28) それゆえアーリ (Urry [1985] p.27) は、諸構造が効果をもつのはそれらの相互依存を通じてのみであること、また、「構造的因果性が特殊な事件の中で表現される程度は偶発的な事柄である」ことを無視したとして、アルチュセールを批判した。「マルクスのために」(1965)の中の画期的な論文、「矛盾と重層的決定」では、アルチュセール自身が毛沢東の地政学的テキスト『実践論・矛盾論』から出発してただけに、『資本論を読む』において重層的決定を無視したことは奇妙である。実際、「理論的実在論」は「マルクスのために」におけるアルチュセール主義によく似ているので、同じ批判を受けている。すでにマッシィは結論的に、経済 (= 諸構造) は必然性の役割を維持し、地理学 (= 重層的決定) は偶然性の役割を維持する危険があるということを危惧している (Massey [1985])。このネオ構造主義批判を推し進める Saunders et Williams [1986] は、そこに「新保守主義」を見る。アルチュセール主義にしる理論的実在論にしる、構造の中に行為者を再び導入すれば、彼らの行為を決定論—経験論に委ねられる偶然性によって緩和された、「因果的力」をもつ決定論—に従属させることになるだけであり、行為者の自律性や企てを忘れてしまうことになる。
- 29) 蝶を採集する遊びは、シナリオのようにあらゆる相互作用に先だって存在している。より一般的に言えば、「つねに所与である」空間の構造化は、方法論的個人主義にとって乗り越えがたい障害なのである (Lipietz [1977] chap.5を参照せよ)。
- 30) しかし、都市の転換の諸形態は、私が考えていたよりも複雑で混成的な形で表れた。例えば、Kaszynski [1982]、Somekh [1987] を参照せよ。
- 31) ブルデューの構築主義的構造主義の定義 (Bourdieu [1987] p.147, 邦訳194頁) の中には、構造主義の成果を失うことなく歴史における大衆の転換行為を考察するための理論的人間学 — Lipietz et Rouilleault [1972] がアルチュセールに対抗して使えると考えた、あらゆる著者に共通する暗黙の理論的人間学 — が見て取れる。したがって、再生産または慣習化された行為としての社会に関する研究は、例えば学問的な枠組みにおいてもある程度まで正当なもの (ブルデューの研究に必要な構成要素) として現れる。これに対し、実践の主観的なもう一つの側面は、変革的な社会的実践に参加すること、少なくとも (認識論的な意味で) そのような社会的実践に「共感すること」を理論家の側に要請する (Lipietz [1973,1977a,introduction] を参照せよ)。

訳注

- [1] この言葉は一九世紀中期に、一定の社会階層・環境の生態学的描写・分析を目的とする書物の標題として用いられた。例えばバルザックの『結婚の生理学』がある。

参考文献

- Aglietta, M. [1974] *Accumulation et régulation du capitalisme en longue période. Exemple des Etats-Unis (1870-1970)*, Thèse Paris I, Miméo.
- Aglietta, M. [1976] *Régulation et crises du capitalisme*, Calmann-Lévy. (若森・山田・大田・海老塚訳『資本主義のレギュレーション理論』大村書店、1989年)
- Aglietta, M. et Brender, A. [1984] *Métamorphoses de la société salariale*, Calmann-Lévy. (斎藤日出治他訳『勤労者社会の転換』日本評論社、1990年)
- Aglietta, M. et Orléan, A. [1982] *La violence et la monnaie*, PUF. (井上泰夫・斎藤日出治訳『貨幣の暴力』法政大学出版局、1991年。
- Althusser, L. et al. (1965) *Lire le Capital*, F. Maspéro. (今村仁司訳『資本論を読む』上・中・下、ちくま学芸文庫、1996~1997年)
- Boltanski, L. (1982) *Les Cadres*, Minuit.
- Boltanski, L. et Thévenot, L. (1987) 〈Les économies de la grandeur〉, *Cahiers du Centre d'Etudes sur l'Emploi*, no.31, PUF.
- Bourdieu, P. [1984] *Questions de sociologie*, Minuit. (田原音和監訳『社会学の社会学』藤原書店、1991年)
- Bourdieu, P. [1987] *Choses dites*, Minuit. (石崎晴己訳『構造と実践』新評論、1988年)
- Boyer, R. [1986] *La théorie de la régulation: une analyse critique*, La Découverte. (山田鋭夫訳『レギュレーション理論』藤原書店、1990年)
- Bowles, S. et Gintis, M. [1986] *Democracy and Capitalism*, Basic Books, New York.
- CEPREMAP [1977] *Approches de l'inflation: L'exemple français*, rapport au CORDES par Benassy, J. P., Boyer, R., Gelpi, R. M., Lipietz, A., Mistral, J., Munoz, J., Ominami, C., Miméo.
- Canguilhem, G. [1985] *Régulation*, Encyclopédia Universalis, t.15.
- COLLECTIF 〈REVOLTES LOGIQUES〉 [1984] *L'empire du sociologue*, La Découverte.
- Debray, R. [1978] *Modeste contribution aux discours et cérémonies officielles du dixième anniversaire*, Maspéro.
- Duby, G. [1988] *Mâle moyen-age*, Flammarion.
- Dupy, J. P. [1977] 〈Autonomie de l'homme et stabilité de la société〉, *Economie Appliquée*, no.1.
- Frobel, F., Heinrichs, J., Kreyes, O. [1980] *The New International Division of Labour*, Cambridge Univ. Press.
- Giddens, A. [1984] *The Constitution of Society*, Polity Press.
- Giddens, A. [1985] 〈Time, space, and Regionalisation〉, Gregory & Urry. [1985]
- Goffman, D. [1959] *The Presentation of Self in Everyday Life*, New York.
- Gregory, D. [1985] 〈Suspended animation: The stasis of diffusion theory〉, Gregory & Urry. [1985]
- Gregory, D., Urry, J. (eds) [1985] *Social Relations and Spatial Structures*, Macmillan, Londres.
- Girard, R. [1961] *Mensonge romantique et vérité romanesque*, Grasset.
- Guillaume, M. (éd) [1987] *L'Etat des sciences sociales en France*, La Découverte.
- Guillaumin, C. [1978] 〈Pratique du pouvoir et idée de nature. L'appropriation des femmes〉, *Questions féministes*, no2, Febrier.
- Hagerstrand, T. [1970] 〈What about people in regional sciences?〉, *Paper and proceedings of the Regional Science Association*, vol. 24, p.7-21.
- Kaszynski, M. [1982] *Observation foncière et division économique et sociale de l'espace*, Thèse Lille I, Miméo.
- Kosik, K. [1968] *La dialectique du concept*, Maspéro. (花崎阜平訳『具体性の弁証法』せりか書房、1969年)

- Linhart, R. [1978] *L'établi*, Minuit.
- Lipietz, A. [1973] 〈D'Althusser à Mao?〉, *Les Temps Modernes*, novembre.
- Lipietz, A. [1974a] 〈Structuration de l'espace, problème foncier et aménagement du territoire〉, Intervention au *Congrès de Louvain de l'ASPENO*.
- Lipietz, A. [1974b] *Le tribut foncier urbain*, Maspéro.
- Lipietz, A. [1975] Quelques problèmes de la production monopoliste d'espace urbain, *Notes Méthodologiques*, Institut de l'Environnement, no.5.
- Lipietz, A. [1977] *Le capital et son espace*, Maspéro.
- Lipietz, A. [1979a] *Crise et inflation: pourquoi?*, Maspéro.
- Lipietz, A. [1979b] 〈Nouvelle solution au problème de la transformation: le cas du capital fixe et de la rente〉, *Recherches Economiques de Louvain*, no.4.
- Lipietz, A. [1983a] *Le monde enchanté. De la valeur à l'envol inflationniste*, F. Maspéro-La Découverte.
- Lipietz, A. [1983b] 〈Le débat sur la valeur: bilan partiel et perspectives partiales〉, Intervention au Colloque de l'EHESS pour *Le Centenaire de Marx*, décembre 1983.
- Lipietz, A. [1983c] 〈Book Review on Massey & Meegan [1982]〉, *International Journal of Urban and Regional Research*, p.302.
- Lipietz, A. [1985a] 〈Réflexion autour d'une fable. Pour un statut marxiste des concepts de régulation et d'accumulation〉, *Couverture Orange CEPREMAP* no.8530.
- Lipietz, A. [1985b] 〈Le national et le regional: quelle autonomie face à la crise capitaliste mondiale?〉, *Couverture Orange CEPREMAP* no.8521.
- Lipietz, A. [1985c] *Mirages et miracles*, La Découverte. (若森章孝・井上泰夫訳『奇跡と幻影』新評論、1987年)
- Lipietz, A. [1986] 〈Les conditions de la création d'un mouvement alternatif en France〉, *Les enjeux institutionnels et politiques de Mars 1986*, janvier.
- Lipietz, A. [1987a] *Le huit infernal, La régulation économique*, scénario et synopsis pour un court-métrage.
- Lipietz, A. [1987b] 〈Régulation: les mots et les choses〉, *Revue économique*, no.5.
- Lipietz, A. [1988] 〈De l'Althusserisme à la théorie de la régulation〉, *Couverture Orange CEPREMAP*, no.8920. Colloque de Shony Books (NY), *The Althusserian Legacy*, 23/24, nov.1988.
- Lipietz, A. [1988] 〈Phèdre: identification d'un crime. D'un vers d'Hippolyte à un livre d'Irigaray〉 Miméo.
- Lipietz, A. et Rouilleault, [1972] *Sur les pratiques et les concepts prospectifs du matérialisme historique*, DES paris I, Miméo.
- Massey, D. [1978] 〈Regionalism: some current issues〉, *Capital and Class*, no.6.
- Massey, D. [1985] 〈New directions in space〉, Gregory, D., Urry, J. [1985].
- Massey, D. et Meegan, R. [1982] *The Anatomy of Job Loss*, Macmillan.
- Matzner, E. et Rusch, G. (eds) [1976] *Transport as an instrument for allocating space and time. A social science approach*, Institute of Public Finance, Technical University in Vienna.
- Sartre, J. -P. (1960) 〈Théorie des ensemble pratiques〉, in *Critique de la raison dialectique*, Gallimard. (竹内・矢内原・平井・森本・足立訳『弁証法の理性批判』3分冊、人文書院、1962~1973年)
- Saunders, P., Williams, P. R. [1986] 〈The new conservatism: some thoughts on recent and future developments in urban studies〉, *Society and Space*, vol.4, p.393-399.
- Sayer, A. [1985] 〈The difference that space makes〉, Gregory, D., Urry, J.
- Serres, M. [1977] *La naissance de la physique dans le texte de Lucrèce*, Minuit.

- Soja, E. [1985] 〈The spatiality of social life: towards a transformative retheorisation〉, Gregory, D., Urry, J.,
Somekh, N. [1987] *A (des) verticalizacao de Sao Paulo*, Mestrado FAU-USP, Sao Paulo, Miméo.
Terray, E. [1977] 〈De l'exploitation. Eléments d'un bilan critique〉, *Dialectiques*, no.21.
Touraine, A. [1978] *La voix et le regard*, Seuil. (梶田孝道訳『声とまなざし』新泉社、1983年)
Gregory, D. [1985] 〈Social relations, space and time〉, Gregory, D., Urry, J.
Walker, R. [1985] 〈Class, division of labour and employment in space〉, Gregory, D., Urry, J.
Wardre, A. [1985] 〈Spatial Change, Politics and the Division of Labour〉, Gregory, D., Urry, J.